
吾輩はミーナである。

灯月公夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吾輩はミーナである。

【Nコード】

N1385J

【作者名】

灯月公夜

【あらすじ】

【『ギフト企画2009』参加作品】吾輩は猫である。名をミーナという。ご主人が吾輩に最初にくれた大切な名前である。今日はクリスマス。ご主人から吾輩はまたひとつ大切なものを頂いた。とても嬉しくて、吾輩は今朝から浮足立っている。最高である。しかし、どうやらそれはご主人も同様らしい。否、むしろ死地へ赴かんとしている戦士のような気さえしている。どうしたのであろう？ その答えはどうやらあの輪郭のみの満月にあるらしい。あれを今日御主人は美咲に渡すと言って出て行ったのである。その時吾輩

はまた頭を撫でてもらえた。応援しておるぞ、ご主人！　しかし、そんなご主人をあざ笑うかのような出来事が。転がり落ちてしまった満月。急いで取りに向かったが、それはあっという間に連れ去られてしまった。こうしてはおれぬ！　ご主人のために早く、そして確実にあれを取り戻さなくては！　吾輩はすぐさまペルシャネコのマロン、ドラネコの大ちゃん、そして三毛猫の小次郎とともに満月を探す旅へと赴く。待っているご主人。必ず今日中に取り戻してみせる！！

1…吾輩とご主人と出会いの記憶（前書き）

まずは拙作を『読んでやろう』と開いていただき、誠にありがとうございます！

拙作は李仁古さま主催の『ギフト企画2009』参加作品です。

キーワードに『ギフト企画2009』または『ギフト企画』と打ち込むか、あるいは秘密基地にある『ギフト企画2009』のホームページより、他の方々の『ギフト企画2009』参加作品を読むことができます。

この機会に、是非とも色々な方々の小説を御覧になってくださいませ！

拙作はあらすじの通り、自分を吾輩と称する猫ちゃんとその仲間たちが奮闘するほんわか一日冒険録、といった感じのものです。

一応最後にほんのり『ギフト企画』の名のもとにふさわしかろうオチも用意しております。

自分を吾輩吾輩言う猫ちゃんに萌えながら、どうぞごゆるりとお楽しみください。

なお、この度僕はもう一作短編を投稿しております。

タイトルは『さあ、最高の夜を演出しましょう！』です。

色々な意味での挑戦作となっております。そちらは短いので、時間があれば覗いてくみてください。

それでは本編です。

このクリスマスに皆さまにほんのささやかな楽しみと、ほんのりとした温もりを提供できますように。

1…吾輩とご主人と出会いの記憶

吾輩は猫である。

名はミーナという。名もなき吾輩にご主人がくれた、大切な大切な名前である。そして、吾輩は真っ黒な毛並みに尻尾の先だけが白く、両の瞳に黄金を持つ雌猫である。

種族はわからぬ。ただ尻尾の先だけ凍えるように白く、またそれだけが吾輩を他の黒猫と区別できるものと言えよう。それほどまでに吾輩の尻尾の先は白く、水に浸せばたちどころにその場所から氷が生まれるほど思えるほどに寒々としているのである。

生まれた場所はわからぬ。父の顔も知らぬ。母のぬくもりも知らぬ。ただ気付いた時には、吾輩は昨夜のごとく身を切り裂く寒空の下でぴいぴい泣いており、空の遙か彼方より来る白く身を扶けるような綿に包まれていたのである。寒さで吾輩は我が身を疑い、空腹に我が意思を疑い、あれほど我が身を扶けるような白き綿が温かく感じられていたことを今でもよく覚えている。

吾輩はあの時は今よりもさらに小さく、無知であった。それは今でもほとんど変わらぬのだが、それでもなお今とは比べ物にならぬほど吾輩は無知であった。

しかし、無知であるが故に、いや、無知であったからこそであったのかもし知れぬ。ただ漠然と吾輩は、じきに自らのこの身が吾輩の意思に反して動かぬことを悟っていた。それだけではなく、吾輩という小さき者はあと数刻もせぬ間に世界から剥離され、するりと何者の目にも止まらず、聞こえず、感じず、あの虚空の暗闇の中に放り込まれるのであろうことを知っていたのである。

ああそうか、吾輩は何者にもならず、何かを成すことも叶わず、このままこの白い綿毛に包まれ溶けていくのかと、吾輩はそう薄ぼんやりとした頭で考えていた。

もうどのくらいの時間、吾輩は歩みを止めなかったのだろうか。

どれだけ歩こうとしても歩けず、気付けば吾輩は吾輩というちっぽけな存在すべてを肯定してくれるかのような、そんな錯覚すら覚えてしまった、この包みこんでくれているこの白い、冷たくて温かい、柔らかくて硬い綿毛のような真っ白な存在へとなろうとしていた。黒猫であるにも関わらず、吾輩は白になろうとしていたのである。

しかしながら、それは今にして思えば失敗に終わったとしか言いようがないように思える。吾輩は白にはなれなかった。不完全だったのである。

そうというのも、吾輩は気付けば太くて柔らかな、しかし芯の硬い、そして何より無限に広がる温もりの持つ揺りかごに抱かれていたからなのである。

それが後の吾輩のご主人となる者の腕であるとは、この時の吾輩には知るよしもなく、ただあの白い綿毛よりも居心地のよい揺りかごに身を委ねていたのである。何よりもこの温もりこそが吾輩を肯定してくれたのである。

そして、今吾輩が横たわるご主人の隣の温もりを持つその揺りかごの中で、白へと変貌しようとしていた吾輩は、黒へとその姿を戻していったのである。

故に、だからこそ吾輩のこの尻尾の先は、凍えるほどに白いのであろう。

しかし、先の回想でわかるように、今朝の気温は寒々としており、このご主人の隣以外はまさにご主人がたまに開く、光がほんのり灯る冷気を放つ箱のようであると言わざるを得ない。

このご主人の横の温もりと、辺りを覆う冷たさの対比が、吾輩からあの頃の記憶を呼び起こしたのであろう。今となってはあの寒空を用意してくださった神とやらに感謝してもしきれぬ思いである。

さて、あまりの寒さに目が覚めてしまったが、また眠るとしよう。そう思い、吾輩は軽く欠伸をひとつすると、またご主人の横で、ご主人にさっきよりもさらに近付き、ご主人と吾輩を覆う柔らかく

大きな毛布の中で丸くなった。

吾輩を包み込む温もりが消えうせ、代わりに切り裂くような冷たさが吾輩を刺したのはその直後であった。

ご主人の唸るような声がしたかと思うや否や、不意に冷氣が吾輩を襲ったのである。

身ぶるいとともに吾輩は飛び起きる。

見るとご主人は、つい今しがたまで吾輩を覆っていた毛布とともに、それを巻きつけるようにして吾輩から離れた位置に横になっていたのである。

そんな観察をしている間にも、せつかく温まっていた身体が冷えていくのを吾輩はひしひしと身を持って知った。

ずるい、ご主人だけ。

吾輩はすぐさま、あの温かな温もりを取り戻すべく、ご主人の元へと転がって行った。

しかし、吾輩が入る場所がない。ご主人の上に前足を置き、反対側を窺う。けれども、反対側には先がなく、毛布の大半が吾輩から見える先、その下のさらに先の奥へと落ちていた。また、あろうことかご主人は、毛布が少ないのは自分のせいであるにも関わらず、残り少ない毛布と心中するかのように小さく丸まっているのである。

これでは吾輩の場所が微塵もない。寒い。このままでは吾輩の命に関わる。

しぶしぶご主人の顔の元まで、沈み込む床に足を取られぬよう歩いていく。傍まで来ると、ご主人もまた寒さに凍えるような表情を浮かべていた。

しかし、明らかに寒いのは吾輩の方である。一も二もなく、ご主人には起きて貰えばならぬ。あるいは毛布を吾輩に与えて貰えばならぬ、

ぺち。

ご主人の顔を前足で軽く叩いてみる。ご主人は眉を顰めるも、しかしそれ以上の変化はない。

ぺちぺちぺち。

諦めずに連続してご主人の顔へ前足を置いてみる。

今度は流石にご主人にも変化があったのだが、低く短く唸ると片手で吾輩の顔へ仕返しとばかりに叩いてきた。

まるで小うるさい虫が耳元を飛んでいるかのように、不機嫌そうに眉を顰めて、しっしっしっしとご主人は繰り返す。それがまたうまい具合に吾輩の顔を連続で打つのである。

流石に吾輩も我慢の限界である。

じゃりん、と吾輩の、普段は肉の間に隠している武器を取り出す。前足をご主人の上で高く上げる。

覚悟するがいい、ご主人。

前足の正義の鉄槌をご主人の無防備な頬に向けて振り下ろす。耳をつんざく様な悲鳴がご主人から発せられたのはその直後であった。

2..吾輩とご主人と首元の贈り物

「いいな、ミーナ。次からは、いくら俺を起こすためだったとしても、爪をたてたまま顔を殴っちゃ駄目だからな。わかったなっ」

飛び起きて早々、ご主人は吾輩を捕まえるや否や、ご主人の顔の目の前で吾輩に諭すように言った。

しかしな、ご主人。吾輩ばかりに非があるのではないということだけでもわかってもらいたい。寒くてどうにも凍えてしまいそうだったのである。わかってもらいたい。

そんな吾輩をよそに、ご主人は吾輩をひんやりと冷たい床に下ろす。しかし、今はご主人が何かを操作し、何故か徐々に暖かくなっている途中であった。原理は良くわからぬが、あの壁の遥か高くでござう言っているあれのおかげなのであろうことは、いくら吾輩といえども見当はついた。

徐々に暖かさを孕みだした部屋に満足しつつ、ご主人の方へ見やると、ご主人は「うわっ、まだ四時半じゃないか」と、寝床の上で眩き、ばりばりと頭を搔いていた。

いくら温かくなってきたとはいえ、しかしまだ床は冷たく、吾輩はご主人の隣へ飛び乗る。ご主人は少し忌々しそうに「昨日は緊張して寝るのも遅かったのによ」と誰になく言っていた。

その声に吾輩は不思議そうに首を傾げ、ご主人の方を見やった。なんとなく、いつもよりも雰囲気というか、立ち居振る舞いというか、とにかくご主人の様子が、いつもよりも固く、まるで強敵を前にしているかのような気がしたのである。

そんな吾輩の視線に気がついたのか、ご主人は大きくため息をつくと、「ミーナ、聞いてくれよ」とまた吾輩の両前足の間に手を入れて、ご主人の顔の近くまで運ばれてしまう。

「今日はな、お前が家に来てから丁度三年目のクリスマスなんだよ」
ふむ、もうそんなに経ったのか。いや、あるいはまだそれほどし

か経っていいいいのか。

吾輩には時間というものがよくわからぬが、しかし、今日はご主人に拾われた日だということはよくわかった。

「あの時は仕事首になった直後で、気分も気力も何もかもが最悪でさ。なんで俺ばかりこんな目に合うんだよ、って世界のすべてを呪ってさ。正直、もう俺なんか死んでやろうかと思ってたんだよ。俺にとっちゃクリスマスなんて、ただのうざったいものでしかなかった。色めく街とか、華やかな音楽とか、道行く他の人たちの笑顔が何よりも腹立たしくて、苛立たしくて、なんかもー色々と許せなくて。何もかもぶち壊してやりたかったもんだ。そんなことを歩きながら延々考えてた俺は、そんなちっぽけな俺自身が何よりも許せなかった」

訥々（とつとつ）とご主人は、なんでもなかったかのように吾輩の目を見つめて吐露を続ける。

しかし、そんなことを言われても吾輩にはどうでもよいことなので、思わず欠伸が出てしまう。

するとそんな吾輩を見て、ご主人は「お前なあ」と苦笑した。それから少し真剣な表情に戻る。

「まあいいや。でな。そんなとき、路地裏を歩いていたら、ふらふらと今にも倒れそうな足取りでお前が歩いているのを見つけたんだよ。『あんなに小さいのに、あんなにふらふらで倒れそうなのに、自分が助かるなんて絶対に思ってもいないのに、それでもあんな小さな身体で、懸命に前だけを選んで進んでいるなんて』そう思ったもんだよ、あの時は。俺もまだ前に進めるかな、ってさ。そしたらちょっと希望みたいなのが持ててさ。でも、気付いたらお前は倒れて動かなくなってる。俺、まるで自分の希望がいきなり潰えたような気がして、それで慌ててお前を抱き抱えにいったんだぜ？ 我ながら酷い奴だよな」

また苦笑して、ご主人は「ごめんなー」と吾輩の身体をぶらぶらとさせ、顔をすりよせてきた。迷惑ではないが、少々めんどくさく

感じる。

やめろと鳴くと、ご主人は「ごめんごめん」とようやくやめてくれた。

「でな、話はここからなんだが、お前を抱きかかえた後、俺は焦りに焦って、とにかくにも動物病院を探そうと走り出したわけなんだよ。お前、もうあの時、凍っちゃってるんじゃないかって疑いたくなるくらいに身体冷たくてさ。拾った理由はともかく、絶対に死なせないからな、なんてかつつけてそこら辺を走り回ったもんだよ。そこで俺は、美咲^{みさき}さんに出会えたんだ。あれこそがまさに『運命』ってやつなのかもな。彼女は右往左往している俺に声を掛けてくれて、それからお前を助けるために動物病院と一緒に探してくれたんだぜ？ 結局、動物病院は彼女が見つけてくれて、そこでようやくお前は治療してもらえて、それで今にいたるわけよ」

はあ、とそこで一息つくかのようにご主人が深く息を吐き出した。「ほんと、お前は俺たちにとって、いや、俺にとって、お前は本当に幸運の招き猫だよ」

黒猫のくせにな、とご主人は言い、それともその尻尾の先だけが異様に白いせいか、と快活に笑った。

相変わらず吾輩は、ご主人に捕まえりぶらぶらと宙をさまよっていた。

ご主人は吾輩に言うのではなく、自分自身に言い聞かせるように続ける。

「今では新たな就職場所も見つかったし、それもようやく波に乗り出した。まだまだ荒い波だけど、俺はきつと乗り切って見せる。もう落ちやしない」

そう語るご主人の瞳の奥は、確かに紅蓮の炎が激しく燃え上がっていた。

と思うと、今度は恥ずかしそうに、それでも躊躇わずご主人は破顔して見せた。

「で、それがきっかけで俺はあの時知り合った美咲さんとは、今で

は交際させてもらっているんだぜ。ほんと、運命ってもんは厄介極
りないものだよな」

快活に笑う。憑きものがどこか落ちたような表情で、ご主人は笑
う。

ぐいっと身体をご主人の、まさに目と鼻先に移動させられる。ば
つちりと黄金と漆黒の瞳が一本の線で結ばれる。

「何から何までお前のおかげだよ、ミーナ。お前のあの前にひた向
きに進む姿が、これまで俺をここ、今日この日この場所まで導いて
くれたんだ」

そこで、より一層ご主人は真剣な面持ちで吾輩の瞳を射抜いた。
今の今までぶらぶらと吾輩の身体で遊んでいたご主人は、そっと
ご主人の隣へ吾輩を下す。そして、身体をひねり、ごそごそとどこ
かからか黒い小さな箱を取り出し吾輩の目の前に掲げる。

「見てくれ。これが俺の覚悟だ」

そう言ってご主人は箱を開く。中には光り輝く小さなわっかが、
しかしその小さな物には不釣り合いなほどに高貴で、周りを圧倒す
るかのような存在感を醸し出していた。

いつかご主人と見た、夜空を穿つ満月を思い出した。夜空にひと
きわ眩く、そして何よりも圧倒的な存在感を持つ、まだ輪郭だけし
か持たぬ金色の満月。

ご主人はその中身がまだぼっかりと空っぽなままの満月を愛おし
そうに箱から取り出すと、真剣な面持ちで見つめた。

「三年前、お前と、美咲さんに出会った今日にこそ、俺は決めてや
ろうと思う。俺のすべてが変わった今日このクリスマスこそ、俺は
言おうと思う。大丈夫。俺はあの頃のような腑抜けじゃ、もうねえ
んだ。ああ、俺はやってやる、やってやるさ」

そして、ひととき強く、掴んだ満月を離さぬようにご主人は手を
握りしめる。

そんな切羽詰まるご主人の顔を見ていると、なんだか辛くなり、
吾輩はご主人の膝の上に飛び乗る。

そして一声。

ご主人はそんな吾輩を、「ありがとう」と目を細くして、あの大きくて優しい手で吾輩の頭をなで繰りまわしてきた。

なすがまま、吾輩はご主人の手の中でもう一度鳴いた。

「おつといけねえ、忘れないうちに渡さなきゃな」

今思い出したようにご主人は吾輩の頭から手をどけると、また身体をひねりごそごそし始めた。

「あれ、どこいったんだ？ ……おつ、あつたあつた。ほらミーナ。じゃーん」

言ってご主人は、小さな赤色のリボンがあしらわれている小袋を取り出し、大きく身体を使いながら吾輩の目の前で得意げに掲げた。意味もわからず吾輩は首をひねる。とご主人は袋をゆっくりと慎重に開く。

「ミーナ、これが俺からのお前へのクリスマスプレゼントだぞー」
しゃりん、と涼しげで清廉で、なおかつ控え目でありながらもしっかりとした『個』を示すかのように、その黄金色の小さな鈴の音が吾輩の目の前で転がる。灰色の首輪に取り付けられた鈴の音が広く貫くように響く。自然と、ご主人が左右に振るそれに合わせて、知らず吾輩の尻尾の白が揺れ動いてしまう。

「どうだ、気に入ってくれたか？」

ご主人は得意げに鼻を鳴らす。

「ほら、付けてやるよ」

ご主人の膝の上で吾輩は一度持ちあげられ、首輪をしやすい位置に移動させられる。これまで吾輩とともにあった、すでにかつてとなってしまった首輪が外される。その鈴が付いた灰色の首輪が近づいてくる。吾輩は自ら、自身の首をご主人に差し出すと、なされるがまま大人しくそれが付けられるのを待った。

「よし、出来たぞ」

鈴の音が鳴る。吾輩の動きに合わせて、楽しそうにあたりいっばいに転がる。

「似合うぞミーナ」

またご主人に持ちあげられる。顔をすりすり。くすぐったくて、吾輩はまた鳴いた。

しばらくすると、いつものように食事が用意され、いつものようにご主人と並んで一緒にそれを食し、そして、いつものようにご主人は「行って来る」と優しく吾輩の頭を撫でると、どんよりとした曇天の寒空の中、外へと出ていってしまった。

上から重ねるように厚着をして。

輪郭しか持たぬ満月を、包み込むように持って。

吾輩の首元で、ご主人がちりんと鳴った。

3…吾輩とマロンと大ちゃんと千代ばあと

身体中の毛が逆立つほど寒い中にも、お天道様の光により、ほんのりと辺りが温かくなってきた頃。

吾輩は、いつも仲間と集まる場所へ向け、とことこと歩いていた。その最中、絶えず響く鈴の音が、実に心地の良いこと。吾輩はいつにもまして上機嫌であった。

古びた家が立ち並ぶ狭い路地を左に曲がった突当たりにある家が、吾輩の目的地である。

木造建築の、ひどく古びた、しかしながら仰々しいまでの威圧感を持つ、その辺の家とは風格も風貌も一線を画す千代ちよばあの家。千代ばあとは、吾輩ら四匹がいつもたいへんお世話になっているとても年老いた人間である。あの皺くちやながらも温かみのある手の平は、吾輩らが知る他の人間とは一味違うというのが、吾輩ら四匹の共通の考えである。

いつものように門を潜ると、吾輩はいつもの集合場所へ向かう。そこは千代ばあの少し大きな庭であり、また縁側の傍である。

吾輩がそこへ着くと、よく見知った顔が二つ、いつものようにそこにあった。先にずいぶんと図体の大きな猫が吾輩に気付いたように、少し大げさに顔を引きつらせた。その様子を見てか、もう一匹の比べるにはなんとも小さく華奢な方が、吾輩の方へと優雅とも言える仕草で見やってきた。

「あら」

毛並みの先の先までよく手入れの行き届いた、吾輩の白とはまた別の、見惚れるほどに眩しい長い毛並みを持つペルシャネコである。彼女は、少しきつそうな声色ともとれる声で、言葉を続ける。

「御機嫌よう、ミーナさん。今日はいつにもまして遅かったですわね」

ふふん、と得意げに彼女は鼻を鳴らす。

「この血統書付きのわたくしよりも後から来るだなんて、誠に仰々しいことですこと」

「すまぬ、マロン。今日はいつにもまして寒くてな。中々家から出られなかったのだ」

「まあ、なんて情けない。その点、血統書付きのこのわたくしにとつては、こんな寒さ、全然大したことありませんわ。貴女とわたくしとは心構えが違いますの」

いつにもまして顎が高くなりながらも、マロンは煌びやかに言う。不思議と不快な気持ちを抱かず、むしろ気持ちが良い。

直後、吾輩らを寒風が襲った。

「くちゅん」

マロンがくしゃみをした。とても小さな、本当に可愛らしいくしゃみである。

その直後、吾輩と、先ほどまでもにいたもう一匹のとてもなぐ大きなドラネコの視線に気づいたマロンは、電光石火の勢いで顔が色鮮やかな朱色に染まる。

「い、今のはくしゃみではありませんわっ。さ、寒さに弱い貴女を鼻で笑っただけですの。ほら、くちゅん、くちゅん。ええ決してくしゃみではありませんことよ！ いいですわね？」

「……」

「……」

「まっ、まあ、わたくしはそこいらの雑多なネコとは違って血統書付きですので、そんなだらしがないミーナさんを谷よりも海よりも深く寛大な心を持ってして許して差し上げましょう」

「………有難う」

「いいえいいえ。貴女が寒さに弱いといことぐらい、いい加減わかっておりますから。全然取るに足らぬ問題ですわ。ええ、そうですとも。ふっ、ふんですわ」

一気に捲し立てる様に言うだけ言うと、マロンは未だ真っ赤な顔

を隠すかのように、吾輩らから顔を逸らす。

そんなマロンを見て、隣で今の今まで静観していた見るからに迫力のある巨大なドラネコが、先ほど吾輩を見て動揺していたのから立ち直ったのか、普段のように『にたあ』と大きく笑った。

「はっ、なあーにが『血統書付きのこのわたくしにとつては、こんな寒さ、全然大したことありませんわ』だよ。思いっきりくしゃみしてんじゃねえかよ」

「うっ、煩いですわねっ」

「しかも、幼なじみのよしみで『寒いから今日は家に居りますわ』と駄々こねるお前を連れだしたのは他ならぬオレ様なんだがな」

「だから煩いと言っておりますのよっ、大ちゃん!? いい加減にその意地汚い汚らしい口をお閉じになってくださらない!? その舌を今すぐ引っこ抜いて差し上げましょうかええ!？」

「おお、怖い怖い」

全身の毛を逆立て威嚇するマロンを、まるで気にも留めず大ちゃんは適当にあしらっていた。

そんな大ちゃんに不機嫌を隠すことなくマロンは鼻で笑った。

「ふん、まさに『大福の大ちゃん』の名に恥じぬ体格の通りの貴方なんて、ちゃっちゃと食べて仕舞われればよいのですわ」

確かに大きいが、それは体格だけではなく腹回りでもあることは否定できぬ事柄である。

「あっ、ちょ、てめえネコが気にしていることを!」

「あら、なんのことかさっぱりわかりませんわ。ちゃんとネコ語でお話になって」

「こんの野郎っ!」

「あら、嫌だ。こんなにも美しいメスを捉まえといて『野郎』だなんて。そんな野蛮でガサツな連中と一緒にしないでくださらない? あんな連中、わたくし大嫌いなんです。ほら、さっさと早急にどっか行っちゃいないさい」

「うぬぬぬ。言わせておけば……!」

大ちゃんのその巨漢から怒気が溢れ出て来る様は、圧巻したものがあったが、マロンはどこ吹く風でそっぽを向いていた。

「……相変わらずだな」

吾輩は少し呆れ混じりに言う。この二匹は、本当に仲が良いこと呆れつつも、微笑ましい限りである。この二匹を見ていると、こちらまでむず痒くなるものである。

吾輩の気持を汲んだのか、もう一匹の吾輩も首もとで楽しそうに転がった。

「あら？ ミーナさん、それは……」

するとその音が聞こえて来たのか、大変楽しげに吾輩を他所に言い合っていたマロンが、もう一匹の吾輩の音色に気がついたのか、不思議そうな面持ちで吾輩へと視線を移してきた。

気がついたのか、マロンは目を少し大きく見開いた。吾輩の首元でまた涼やかに鳴る。

「まあ、なんと綺麗な鈴の音ですこと！ どうなされたの？」

「うむ。実は今朝方ご主人に戴いたのだ」

つい吾輩は胸を張ってそう答えてしまった。胸が一杯になって、口から弾けて外へと飛び出して来ようとする。どこからともなく溢れ、そして今にも零れ、はじけ飛びそうなそれは、しかしどこかこのまま外へ出してしまふのはとても勿体ないような気さえた。

「お、おおっ！」

視線を大ちゃんに戻すと、大ちゃんは遅れて気付いたのか、目を大きくしていた。

「な、なんてえか、その、」

息が詰まったかのように、大ちゃんはどこか苦しそうになんとか深呼吸をふいに繰り返し始める。それから、しかしまだ少し苦しいのか、どこかぎこちないながらも口を開く。

「へ、へっ。か、かわいいじゃあねえかつ、につ、似合ってるぜっ」

しかし、何故か大ちゃんは終始焦ったように視線を縦横無尽に巡らせ彷徨っていたせいで、結局視線を合わせることは叶わなかった。

まだ苦しいのか、全身の毛が先のマロンの一件とはまた違った感じに逆立っていた。ひよっとしたら、今日はこの寒さのせいで少し体調が優れないのかも知れない。

「うむ。有難う」

だから、そんな状態にあるにも関わらず吾輩への気配りを忘れてくれなかった大ちゃんに対して、吾輩は素直に礼を述べ、頭を下げた。首元で、もう一匹の吾輩も、合わせて鳴く。大ちゃんの隣では、マロンが「しゃきつとしなさい！」と小さく一喝していた。それほどまでに今日は体調が優れないのだろうか。

心配のあまり声を掛けようかとした矢先、無為に縁側から控え目な音が聞こえ、続いて吾輩らがよく知る声の上から降ってきた。吾輩ら三匹とも、こぞって声がした方へ顔を向ける。少し曲がった腰に、ひどく暖かそうな出立^{いでた}ちの老いた人物がひとり、とても愛想の良さそうな笑みを浮かべていた。吾輩らは口々に鳴いた。千代^{ちよ}ばあである。

「おや、まあいらっしやい。今日はまた寒いねえ」

言いつつ、柔らかな笑みを崩さず草履を履くと、千代ばあはえっちらおっちら、ゆつくりとした動作で、慎重に庭に降り立った。その両手には大きな皿があり、溢さないようにまた、今度はさらに慎重にゆつくりと千代ばあは吾輩らの前にしゃがみ込んできた。

「はい。温かいミルクだよ。これで温まりなさいね」

それを置くと、千代ばあは優しげな面持ちのまま吾輩ら三匹を見つめ、ほほ笑んだ。

「今日はクリスマスだからね。今日だけは特別にこのミルクを、このしがないおばあちゃんからの、いつも家に遊びに来てくれるあなた達へのプレゼントとさせておくれ」

言いつつ、千代ばあは吾輩の頭を撫でてくれた。皺くちな手。ひどく懐かしい温かみに、吾輩は目を細める。手が離れる瞬間が、とても寂しい気がした。

吾輩らは、千代ばあの好意を無下にするまいと、仲良く三匹並ん

でお皿へ首を突っ込む。

美味い。舌を巻くとはことか。熱いのが苦手な吾輩らを考慮してくれたのか、決して熱すぎることはなく、それでも十分に身体が温まる温度である。吾輩ら三匹はしばし無言で、舌鼓を打っていた。

やがて皿の中身は空となり、名残惜しげに皿を舐めまわすのを諦めて顔を上げると、そこでは千代ばあが縁側に腰掛け、日溜まりを思わせるように緩やかに目を細めているのが目に入った。

吾輩はそんな千代ばあを見てまた鳴いた。

御馳走様でした。

4…吾輩と美咲と震える身体

「千代子^{ちよこ}さん、またミーちゃんたちがいらしてるんですか？」

その声に、吾輩ら三匹は一斉に声の主の方へ顔を向ける。

吾輩のよく知る顔がもう一つ、両手に盆を持ちながら緩やかに縁側へと近づいて来ていた。挨拶代わりに吾輩が率先して鳴くと、声の主はにっこりと芯の強さが窺える、波立たぬ湖畔のような笑みをたたえた。安心できて、後ろを緩やかに支え押してくれそうな笑顔だった。

「そうなんですよ。こんなに寒いのにねえ。だから嬉しくって」

千代ばあは膝に乗せたマロンを労わるかのように、ゆったりとその背を撫でつけながら答える。その膝の上では、マロンが蕩けそうな顔で、どこか優越感に浸ったような表情のまま、下で悔しそうに毛を逆立てている大ちゃんを見ていた。

千代ばあから頂いた馳走をおいしく平らげた後、しばしば吾輩らは誰が千代ばあの膝の上に乗るかで揉めていた。

吾輩らにとって、千代ばあの膝上はまさに特等席。その安らぎとつたら形容、筆舌ともにし難く、すでに生涯の友とも言える吾輩ら四匹であったとしても、こればかりは凌ぎを削り闘わねばならなかったのである。

しかし、吾輩は今日の闘いには参加せずにいた。これまで吾輩ばかりが千代ばあに撫でられていたので、これはそれを差し引いての譲歩であった。もっとも、どこか恨めしげな視線二つに、この闘いに参戦してしまうと吾輩がどうなってしまうのか分かったものではない、という危惧もあったのだが。この時ばかりは見境がなくなりかける吾輩らであった。そういう訳で、吾輩は声の主が現れるまでごろごろとまどころんでいたのである。

「今日はとてもお寒いですから、ほどほどになさってくださいね」

千代ばあの答えに、本当に心配をに滲ませながら、先ほど現れた

美咲は千代ばあの隣へ腰を下ろす。それから持ってきた盆から急須を取り出すと、一緒に持ってきたのであろう湯呑みの中へ吾輩空とすれば目を覆いたくなるほど熱そうなお茶を注いだ。その際、地獄から湧き上がるかの如く湯気が白く立った。入れ終わると、美咲はそれを千代ばあに差し出した。

「これ、温かいお茶です」

「ありがとうございます」

千代ばあはゆっくりと笑みを崩さないまま答え、マロンから手を退けて壊れものを包むようにそれを受け取った。その際、マロンが結構寂しいそうな表情を見せたのは御愛嬌である。

「美咲さん、いつもいつもすみません」

お茶を一杯啜ると、千代ばあはそう言った。

「今日くらい、お仕事休んでもよかったんですよ」

「そんなことできませんよ」

そう言うのと、自分でいれたお茶を美咲はゆっくりと一口啜った。それからにっこりと笑うと、「それに、私は千代子さんにもお会いしたかったですし」と嘘偽りの感じられない声で言った。

「そうは言っても、今日はクリスマスでしょう？ 美咲さんの恋人さんはなんと言ったかしら。クリスマスなんですから、どこかデートでも行く予定とかはなかったの？」

「真人さんは――」

そこで口を開いた美咲は、ほんの少しだけ固まったような仕草を見せる。しかし、すぐにそれでも少しだけ拗ねたような口調のまま平生とそう変りなく続けた。

「真人さんは、今日は一日大変そうで、そんな時間もないみたいなんですよ」

「恋人さんはなんのお仕事をされているんですったけ？」

「パティシエですよ。まだ見習いに少し毛が生えた程度らしいのですが」

それだけ言い、美咲はまた一口飲もうと口元へ湯呑みを運ぶ。

この時、吾輩の目には千代ばあの目が鋭く光ったのを見た。まるで獲物を狩る猫のような、そんな目であった。

「でも、今日はこの後何かあるんでしょう？　たとえば、大事な話があるとか」

千代ばあの一言に、美咲はお茶を飲み損ない、声にならない声を出してからせき込んだ。それはもう平生の姿とはとても思えない、そんな慌てぶりであった。

落ち着くと、どこかおどおどとした声色で美咲は千代ばあに尋ねた。

「ど、どうしてそんなこと言うんです？」

「だって今日美咲さん、どこか落ち着きがないんですもの。そりゃもう一発でわかりますよ」

そう言くと、確信を得たような悪戯じみた笑顔で美咲を千代ばあは見た。

対して美咲は耳まで真っ赤にして、しばらく息が詰まって声が出ないような様子であったが、肩を少し縮ませて、さっきとは打って変わって蚊の鳴く様な声で「やっぱり、わかりますか……？」と千代ばあに尋ねた。

「そりゃあ分かるわよ。お婆ちゃんをあまり舐めないことです。伊達に長生きはしてないものですよ」

「そ、そうですか……すみません」

縮こまりながら言う美咲。完全に縮こまり、固まり、委縮してしながらも真っ赤なその顔は、何故かとても可愛いらしいと思ってしまう。

吾輩は首を傾げる。美咲は、一体どうしたのであるのか？　まったく平生の姿と異なる美咲の姿に、吾輩は戸惑いを隠せずに鳴いた。気付けば美咲に声をかけていたのである。何故だろうか？

美咲はそんな吾輩を視界に、ほんのり潤んだような瞳に吾輩を映した。

「ミーちゃん」

そして美咲は吾輩を呼ぶ。

「こっちにおいで」

吾輩は美咲に、ご主人と同じく両前足の付け根をやんわりと抱かれ、美咲の膝もとへ運ばれる。美咲の膝は、ご主人と似てやはり温かかったが、いつもよりも少し固い気がした。

「あら？ この首輪」

首の鈴に気がついたらしい。美咲に首輪を触られる。

「そうか。今日はクリスマスですもんね。ミーちゃんよかったわね、凄く似合ってるわよ」

首の下を撫でられ、嬉しく吾輩は鳴く。やった。褒められた。

それが本当に嬉しくて、首元から聞こえてくる心地よい音色とともに吾輩はもう一度鳴いた。

続けざまに美咲に頭を撫でられる。すごく心地よい。頭から首、首から背中へと、ゆったりと繰り返し繰り返す撫でなれる。

たまらず、吾輩は蕩けたような、ゆるみきった声で鳴く。見上げると、美咲もにっこりとほほ笑んでくれた。いつの間にか、膝は固さが抜けていた。

ふと、吾輩は何者かの視線を感じた。

それに釣られるように視線を落とす。

そこには、ひとり寒風の中佇んでいる大ちゃんの姿が。

「……いいなあ」

そんなことを大ちゃんは、吾輩とマロンを遠い目で見つめつつ呟いていた。その背はひどく哀愁漂っているように見えた。

「……………すまぬ」

他に言葉が見つからず、そんなことを吾輩は言う。

それだけではない。

吾輩は、彼の存在を本気で忘れていたのである。今の今まで隣にいたのに、である。

「すまぬ、大ちゃん」

言葉は寒風に乗り、空しく流れていった。

そんな吾輩の言葉が聞こえたのか、虚ろながらも何か力を秘めた目で吾輩を見やり一言。

「へっ、き、気にすんじゃねえよ。オレ様、全然気にしてねえからさっ。ちょ、ちょっくら、そこら辺走ってくるわ」

その言葉は、吾輩以上に空しく寒風に流されていった。大ちゃんはそのっきりどこへとも知れぬところへ駆けだして行った。吾輩はそんな後ろ姿を、そっと眺めていたのである。

「あら、ドラネコのあの子、どこか行っちゃいましたね」

吾輩と同じく見ていたのか、千代ばあが美咲の隣で呟いた。

「誰にも構ってもらえなくなっちゃったからかしらねえ？」

それはつつこんではならないところだと思ったのは吾輩だけか？

「今度はちゃんとお相手しなくちゃね」

隣でまた千代ばあがそんなことを呟いていた。と、また楽しそうに皺くちなな目をよりいっそう皺くちなに細め、狩人の目をした千代ばあは美咲を見やった。

「それで？ 今日は何があるのですか、美咲さん？」

ぴくり、と再び美咲の膝が跳ねた。同時に呼応するかの様に膝も再び固くなる。千代ばあから得も言われぬ力が発せられているのか、普段狩る側の吾輩も千代ばあの力に恐れおののく。これが先の者か。吾輩はまたひとつ知恵を得たが、しかしこんなものは得たくなかったというのが本心である。千代ばあの力に押されてか、背中にある美咲の手から冷や汗が出て来て、吾輩の背を気持ち悪く湿らせた。

不意に、なんの前触れもなく美咲は両手を叩き、吾輩のことを忘れたかのような勢いで立ちあがった。突然のことで悲鳴を上げながら振り落とされる吾輩。危ないではないか美咲。

「そ、そう言えば私、お部屋のお掃除の途中でした！ は、早く済ませてしまいませんか！」

少し上ずったような声で美咲は捲し立てる様に言う。そしてさすがず、すたこらさっさと言わんばかりにこの場から立ち去——ろう

とした。

その逃避は、無情にも千代ばあが美咲の手を握ったことにより儚く散った。

「あら、そんなことは後でもいいのですよ、美咲さん」

千代ばあは、縁側にゆったりと座ったままにつこりと人の良さそうな笑みを浮かべていた。

しかし、吾輩は見ていたのである。千代ばあが美咲を捉まえるその瞬間を。あれはまさに蛇のごとき素早さであった。

気がつけば、吾輩の身体は震えていた。

「ね？」

「……はい」

すくすくこと、観念したように美咲はまた千代ばあの隣に座る。すぐさま、吾輩は美咲の膝に飛び乗る。やはり美咲の膝は固かった。しかし、そんなことは今はどうでもよかったのである。

美咲もすぐに吾輩の背を、心を落ち着けるようためか、先ほどよりもさらにゆったりとした動作で頭から背へと撫でた。

この時の吾輩らは、まさに互いが互いを必要としていたのである。ちらりともう片方の美咲の手を見ると、そこには千代ばあの手が未だ握られていた。

「それで、今夜は何があるんですか？」

「あの、その……今夜」

おどおどおずおずと言った感じで、少々どもりながらも美咲は口を開く。その隣では、いつもの二割増しといった感じの千代ばあの笑顔が。

「えっと、あの……みぎわ公園ってところで」

「はい、この季節、イルミネーションでいっぱい綺麗なあの公園ですね」

「……………そ、その、公園のとあるところで」

「噴水の近くの大きなクリスマスツリーですね。あの、恋人たち御用達の」

「――ッ！ ……そ、そこで今夜は待ち合わせをしていました」
「何時くらいに？」

「……………夜の八時くらいに」

「どうして？」

「……………」

「どうして？」

「……………」

「どうしてなのかしら？」

「……………たっ、大切な話があるからっ……………」

こういうのを最凶なメスの力と言うのだろうか。吾輩はがたがたと震え、じっとりとした美咲の手の平を感じながらそんなことを思った。首元のご主人も吾輩と一緒に震えたように転がっていた。見上げると、茹であがりそうな顔しながらも、何故か真っ青な美咲の顔がそこにあった。手の平と膝を通して伝わる震え。吾輩らは、互いを労わる様に一緒に震えていた。

「あらそうなんですか！」

千代ばあが満面の笑みを浮かべながら、弾んだ声で美咲に言う。びくりと、美咲の身体が震えるのを感じたと思ったら、何かひどく脱力しきったような気配を吾輩は感じる。見ると、美咲の手を今の今まで握っていた千代ばあの手には、いつの間にか美咲が先ほど用意したお茶があった。

千代ばあはゆっくりと幸せそうにそれを啜る。

「いいですねー」

ふとまた視線を感じ、吾輩は千代ばあ顔の下を見やった。

そこには、まさに腰が抜けたような顔のマロンが。

心配になるほどがたがたと震えたまま、助けを求めるような目で吾輩を見ていた。

「……………すまぬ」

そんなマロンに吾輩は、美咲の膝上からそれしか言えなかった。吾輩はどうやら、あまり周りが見えていないようである。

5.. 吾輩と殿下と最後の仲間

「クリスマスケーキを買ってきてくれませんか？」

「はい？ あ、クリスマスケーキなら私をご用意しても構わないと、前におっしゃられていませんでしたっけ？」

「いえ、ふと思ひまして。年寄りの気まぐれですよ。美咲さんのケーキはすごくおいしいんですけど、何故か今年は市販のケーキが食べたくなりましてね。申し訳ありませんが、ちよつと買ってきてくださいませんか？」

「……はあ」

「あつ、どうせなら美咲さんの彼氏さんのお店がいいですね」

「は？」

「ケーキはお任せしますから、おいしそうなものをお願いしますね。はい、これお金です」

「ちよつ、ちよつと千代子さん」

「ああ、おつりは取つといてくださつて構いませんよ」

「いえ、そうではなく！」

「頼みましたよ、美咲さん。それと、多少道草も大丈夫ですからね」

「千代子さん！」

そんな経緯を経て、吾輩、美咲、マロンは千代ばあの家を追い出されていた。もっとも、追い出されたのは美咲であつて、吾輩とマロンは別にそんなわけではないのだが、それでも吾輩らは美咲の少し後ろをついて歩くように千代ばあの家を後にしたのである。

「どうしよう……」

これで通算十二回目になるため息をつきながら、美咲はとぼとぼと吾輩らの前を歩いていった。その足取りは、見るからに重い。しかし、反面とても軽そうである。先ほども、忘れていたことをぷりぷり怒っていたマロン曰く、あれは本当は今にも駆けだしたいのに

それをぐつと堪えているから、とのことであつた。しかし、吾輩にはその意味を測りかねた。それをマロンに言うと、彼女はひどく呆れた顔で吾輩を、むしろどこか憐れむように見てきたのである。何故そんな顔で、そんな目で吾輩を見てきたのであろうか？

前に行く美咲の足取りは、やはり重そうであつた。見上げると、綺麗な眉を顰めうんうん唸っているようにも見えた。吾輩はそんな美咲が心配でならない。

「なあ、マロン。やはり美咲は大丈夫なのであろうか？」

「だから何も問題ないと言っているでしょ！ まったく、あなたのそのとぼけたところは見ていらいますわねっ！」

「……なんだか知らんが、すまぬ」

「まったく、あなたのその足りないところ、早く直してくださいさらないかしら？」

「……善処しよう」

ふんっ、とマロンは再び前を向いてしまった。

また怒られてしまった。一体、吾輩には何が足りないというのだろうか？ わからぬ。皆目見当がつかない。つかないが、つかないなりに努力だけはしてみようと思った。どんな努力はわからぬが。

ふと前に行く美咲の足が止まっていることに気づき、吾輩も足を止める。美咲は、前方をじっと凝視していた。

美咲の視線をたどり、吾輩もそちらの方を見やる。

まず見えたのはちよつとした人ばかりであつた。奥に建物らしき物も見えたが、いかんせん吾輩らの視線は低く、よくわからなかった。その人ばかりは群れをなし列をなし、離れて行く人々の手には様々な大きさの手提げ袋が握られていた。

吾輩は首を傾げ、マロンの方を見やる。

「あれは？」

「さあ？ 皆さま方、何やら嬉しそうな、幸せそうなお顔をされていますけど」

二匹で言い合いながら、不思議だなと首を捻る。すると、美咲は

意を決したように「よしっ！」と一言呟き、今度は先ほどまでは打って変わり力強い力で歩き始めた。それを慌てて吾輩らは追いかける。

「一体、どうしたと言うのであろう？」

「ああ、なるほど」

呟くように吾輩の口から疑問が零れると、何やら横でマロンがふにやりと会心を得たとばかりにはほほ笑んだ。何がわかったのかと尋ねようとした矢先、前から吾輩のよく知る声が聞こえてきた。吾輩はつい美咲たちを置いて走り出してしまった。後ろからマロンの声が聞こえたが、しかし吾輩には届かなかった。首元の鈴がせつづくように鳴る。

「メリークリスマス」

ちよつとした人だかりを避ける様に横に回り込むと、そこには人々に何やら箱を手渡しているご主人の姿があった。家にいるときは打って変わり、全身真っ白な出で立ちのご主人は、すごく満足そうな顔をして人々に箱を渡していた。

後ろから吾輩を追いかけて来たマロンの声を聞きながら、吾輩はいご主人に声をかけてしまう。

「ん？ ミーナ、お前どうしてこんなところにいんだよ？ ——と。

はいどうぞ。メリークリスマス」

ご主人はすぐに吾輩に気付いた。ご主人は少し目を丸くして吾輩らを見やった。それがたまらず吾輩はまた鳴く。後ろからマロンの呆れたようなため息が聞こえてきた。

ご主人は吾輩らを気にかけていたようだが、それでも流れるような動作で人々に何かを受け取ってはお返しとばかりに箱を渡していく。吾輩らを多くの人々が興味深そうに見つめていたが、吾輩には全然気にならなかった。外でご主人を見かけられた今、吾輩はそれだけで満足だったのである。

「ここらこらミーナ。そんなところで足を止めるな。お客さんの邪魔だろ」

目の前の客が一区切りついたのか、ご主人はそう言いつつ振り返り吾輩らを見た。

いかん、怒られてしまった。どうしよう？

「ごめんなさい、真人さん。私の後について来ちゃって」

「あうわっ！？ み、美咲さん！ ど、どうしてここに！」

そんな吾輩に救いの手が差し伸べられたかのようなのである。

いつの間にか、しかし少しもじもじとした様子の美咲がご主人の前に経っていたのである。丁度先ほどまでご主人の前が開いていたため、その隙に入ったのであろう。

しかし、ご主人に声をかけられた美咲は何となく浮かない顔していた。

「……そんな幽霊にでもあったような顔されたら流石に傷つきます」

「あつ、その、すみません」

「冗談です」

そう言って美咲にはにっこりとほほ笑んだ。邪氣の感じられない笑顔だった。

……これは先ほどの腹いせなのだろうか？ 吾輩は思考を停止する。

「おっ、真人のねえちゃんじゃねえか」

その時、ご主人の横から、そんな野太い声が聞こえてきた。

「あ、店長」

「須藤さん、こんにちは」

「おう。相変わらず美咲ちゃんは可愛いね」

現れたのは、ご主人よりも頭二つ分ほど高く、なおかつ幅も倍以上大きな大男であった。ご主人と同じ白い服を着ているにはいるのだが、その服は耐えきれず内に秘めている筋肉により今にも引き千切れそうである。顔も実に濃い。なんであろうか、この濃さは。ご主人の十倍は濃い顔をしている。髪は一切生えていない頭部。全体に大きく深い顔つき。大きな口。黒くもじゃもじゃとした大層な髭が口元を覆っている。一見、真っ黒に染めた眼鏡で目を隠している

ため目を見ることはなく安心できるかと思いきや、目がよく見えな
いことによりいっそう威圧感を覚える。年はおよそ四十そこらとい
った感じであろうか。美咲にかけた声も随分のがっかりとしており、
ご主人の声とは全然違った。豪快に笑う声も表情も、全然ご主人と
は違う。なんだろう、これは。カッコイイ。そうか、これを渋いとい
うのか。素晴らしい。よし、これから彼のことは殿下とおよびし
よう。

「こっ、怖い方ですわね。出来ればお近づきなりたくありませんわ」
「そうか？ 吾輩はカッコイイと思うのだが」
「……………」

マロンがいきなり後ずり始めた。三步ほど下がった今なお、なん
となく腰が引けているように見える。

「どうした？」

「い、いえ……別に……」

「そうか。変な奴だな」

「……そっくりそのままお返しいたしますわ」

さらにもう一步ほどマロンは吾輩から後ずさった。流石に傷つく
というものである。

また上から豪快に笑う声が聞こえ、吾輩は急いでそちらに視線を
戻す。

「よう、こんなところへ一体どうしたんだ？ ひょっとして真人に会
いに来たのか？」

「ちっ、違いますよ！ もう全然まったくこれっぽっちも微塵も一
片の欠片ですらそんなことはありませんよ！ 仕事です仕事！ ち
よっとした頼まれごとで！」

「ははは、そうかそうか。で、何を頼まれたんだい？」

「クリスマスケーキをひとつ頂こうかと」

「おう、そうかそうか。毎度あり。やっぱり真人が焼いた奴がいい
か？」

「いいえいいえまったくその必要はありませんよ。それ、まったく

同じことを千代子さんにも言われましたけどもうむしろ真人さんのケーキは食べ飽きるほど食べさせて頂いているのでもむしろもうお腹いっぱい？ 味覚えちゃった感じ？ で全然違う方が焼いた物で全然構いませんよ！ ていうかその方がいいです」

「おう。ははは、そうかそうか。そりゃ助かる。もうどれが誰が焼いたのかさっぱりわからなくてな。まあ、誰が作ろうがこの『甘夢城』^{ようちやう}店長、須藤^{すどう}勇雄の目が黒いうちやあ、ぜってえ不味い食いもんを客に出しゃしねえぜ」

「はい！ このお店のケーキはどれもおいしくて可愛いつて評判なんですよ」

「そうかそうか。そりゃあありがてえ。今度その女の子たちと一緒に来な。サービスしとくぜ」

「はい！ ありがとうございます！」

「――ところで美咲ちゃん。さっきからそこでボロクズみてえな野郎がひとりいるんだが」

「うわああああ！ ちょ、真人さん！ しっかりしてください！」

「……ごめん、美咲さん……ほんと……なんかごめんなさい……」

豪快に笑う殿下、灰色で今にも砕けそうなご主人、そんな粉々になったご主人に慌てて声をかけている美咲。

ふむ。

「なんだろうな、これは？」

「さあ？ ただもうお腹いっぱいと言った感じなのは確かですわ」

「お腹いっぱいだと？ 何故？ 吾輩らはまだ何も口にしておらんぞ？」

「ああ、はいはいそうでしたわねそうでしたわね」

そんな会話をマロンと繰り広げつつ、未だに他の人の目を憚ることなく繰り広げられている目の前の光景を眺めている吾輩たち。マロンの言葉といい、まったくわからぬ。

「おおっ、主らは！」

そんなこんなしていると、吾輩の丁度背後からよく聞きなれた声

が聞こえてきた。マロンが閃光と見紛う速さで背後へ振り返り、それを追いかける様に吾輩も背後へ振り返る。

そこには、一匹の三毛猫が凜々しくあった。すらりとした肢体。痛々しいまでに全身に怪我の跡があり、その凜々しい顔の右目にはひととき目立つ大きな傷がある。意志の強さが滲み出ている琥珀の瞳に、吾輩とマロンが映し出されていた。

「ミーナ殿も……マロン殿も。まったく珍しいところで出くわしたでござるな。これより遅そばせながら、千代ばあの屋敷まで馳せ参じようと急いでおったところでの。こんなところでいかなされた？」

しっかりと芯の強い声で、吾輩らのもとへ隙なく近寄って来る三毛猫。吾輩ら最後の仲間、小次郎である。

「き、奇遇ですわねっ。こ、小次郎さまこそ、このような場所でどうなされたのです？」

吾輩が口を開くよりも先に、上ずったような少し甲高い声をマロンが出す。マロンの方を見ると、さっきまでとは打って変わり身体もかっちかちであった。突然どうしたのであろうか？

「いやなに。拙者、少々野暮用を老師に頼まれておってな。もう片付いてしまったが」

「そ、そうですの」

「主らは何故このような場所に？」

「ああ、それはな。そこにいる美咲を追いかけてきたらここに来てしまったというわけだ」

吾輩も会話に加わるべく声をかける。横でむっとしたようなマロンの声が聞こえてきた。小次郎も何故かたじろいでいた。

「さ、左様か、ミーナ殿。……………ん？　そう言えばあのドラム缶がないが、どうしたのだ？」

「……………あ」

「……………ふむ」

小次郎の問いかけに吾輩とマロンは同時に何とも形容しがたい顔

で互いに向き合う。

ドラム缶とは、ケンカするほど仲が良いという見本そのものばかりに小次郎とにらみ合っている身体も大きければ他の色々なところも大きなドラネコ、つまりは大ちゃんを小次郎が差す言葉なのだが――

「……忘れておったな」

「……忘れてましたわね」

大ちゃんは未だあの時走り去ってから姿を見せてはいなかった。

吾輩としたことが。先ほど反省したばかりだと言うのに情けない。今どこで何をしているのか皆目見当もつかぬ。いや、ひよつとしたらもう千代ばあ家の家に戻って今頃あの特等席に座っているかもしれない。そうであって欲しいと思う吾輩はいけない奴なのであるのか？

「ほう、左様か。それは愉快愉快。――つまり、邪魔者はいない――いやあ、ほんとに愉快愉快。あつはつはつは」

うんうん、とまるで独り言のように小次郎は繰り返す。途中、微妙に聞き取れないほど小さく何かを呟いたようなのだが……はて？

なんと言ったのであろう？

吾輩が首を傾げると首元の鈴がちりと転がった。

「むむっ！　そ、その首元にあるのはっ！」

鈴の音が聞こえたのか、小次郎がもの凄い勢いで吾輩を見る。また横でマロンのむっとしたような視線を感じる。

「み、ミーナ殿。その首にかかっているのはもしか……」

「うむ。ご主人に今朝方頂いたのだ」

尋ねるような小次郎に、吾輩は得意になってそう答えた。みんなに気がついてもらえるというのは、こんなにも嬉しいものなのだ。やはり誇らしい。

「な、なるほどでござる。左様でござったか。――そ、その……とととても、かかかか――」

しかし。

吾輩はふと思い出す。小次郎はこの首輪を嫌っていたという事を。

理由はわからぬが、以前吾輩ら三匹の首に嵌まっている首輪を見て
そう言っていたことがあったのである。その時吾輩はその理由を尋
ねたのが、結局はぐらかされてしまったままである。

そんなわけで、小次郎は唯一吾輩らの中で首輪をしてはいない。
かと言って吾輩らのようにご主人がおり、一応お寺で寝泊りをして
いるとのことを以前聞いたことがある。あ、そう言えば小次郎はそ
の時そのご主人の事を「恩人であって主人なのではない」と言っ
ておったな。

それはともかくである。理由は一向にわからぬが小次郎はこの首
輪と言う物をどこか憎んでいる節があるのは確かな事なのである。
そんな小次郎に嬉しそうに首輪の事を報告するとは――

「……すまぬ、小次郎」

「――かわい、いッ!?　　いつ、いきなりどうなされたのだ!?」

「いやなに……ともかく謝りたくなつてな」

「そ、そうでござるか……」

「あ、あの、小次郎さま!」

突然割り込むようにマロンが声を上げた。何事かと顔を向けると、
吾輩には微妙に怒ったような顔を、小次郎には微妙にもじもじとし
た顔を、といった具合の何とも不思議な顔をしていた。器用な奴で
ある。

「その、あの――」

「――おら、真人!　　てめえ次期店長候補なんだからしゃきつとし
やがれや。休憩にしてやっから美咲ちゃんを送って来い!」

マロンが何やら口を開こうとしたその時。吾輩ら三匹の全身の毛
が逆立つほど気合の入った声が、突如吾輩らの後方より聞こえてき
たのである。

振り返ると殿下と美咲と、それから白い服の上に今朝方家が出る
際にご主人が着て行った分厚い服を羽織っているご主人の姿があっ
た。

背中を叩かれたのか、痛そうな顔でご主人は背中をさすっていた。

「わかりましたよ。……イテテ。それじゃあ、店長。ちよつくら美咲さんを送ってきますね」

「では、須藤さんまた」

「おう！ 美咲ちゃんも気をつけてな」

そして殿下に見送られるようにしてご主人と、殿下に一度、ぺこりと頭を下げた美咲が歩き始めた。

ふむ。

「付いて行くか」

「……あなたって、本当にご主人さまが好きね」

「うむ。この世で一番誰よりも何よりも大好きだ」

「そ、そんな……拙者に付け入る隙はないのか……」

何故か顔全体に哀愁を漂わせ始めた小次郎がいたが、しかし、ご主人と外と一緒に歩ける機会。そうやすやすと不意にしたいくない。後ろでマロンが小次郎に必死といった感じで声をかけていることだし、吾輩は必要あるまい。さて、後に一緒についていくか。

「二人とも、式の報告と子供の報告はちゃんと必ずするんだぞ！」

あつ、ご主人と美咲が同時にこけた。

「てっ、店長！」

「須藤さん！」

ご主人と美咲の声は重なり、寒空をほんのりと温めた。

6.. 吾輩と笑顔と不穏な気配

とぼとぼと二人と三匹が道を歩く。特に吾輩ら三匹はご主人たちの後ろを追いかける様に歩いてた。

「……」

「……」

そして、先ほど殿下から別れてからというものの、美咲とご主人に会話はなかった。視線すらまともにあっていないようなのである。それどころか空気もいつもと違う気がする。どうしたのだろう。喧嘩でもしてしまったのだろうか？

後ろでマロンと小次郎が言葉を交わしていたが、それは吾輩の右から入って左へ抜けて行っていた。前を歩く二人が心配でならない。出来れば吾輩は二人ともずっと仲良くしてもらいたいのだ。

「……」

「……」

前行く二人はやはり無言であった。しかも、足取りも何やら重そうで、全然前に進まない。何が一体二人をそうさせているのであるうか。わからぬ。心配でならない。

よし、こうなったら。

吾輩は不意に目の前を歩くご主人の背中へ飛びついた。そのまま頭の方へ向って駆けあがる。

「ぬわっ！ こ、こらっ、ミーナお前何してるんだ！」

ご主人が突然のことに驚きそんな声を出した。しかし、ご主人は吾輩を振り落とそうとはしなかった。それどころか、吾輩が上りやすいように背まで曲げてくれたのである。感激。いや、それは今はどうでも良い。吾輩はご主人の背を駆けあがる。そしてご主人の肩へ。

「もう、いきなりどうしたってんだよ、ミーナ、びっくりするじゃ

ないか」

そんなことをご主人は言う。びっくりさせたのである。吾輩は喉を鳴らし、ご主人の首元にじゃれつく。ご主人がくすぐったそうに身を振る。すかさず吾輩は隣にいる美咲に向かって飛びつく。

「うわわっ!？」

見事美咲の肩に飛び乗る。美咲はご主人と違って肩が狭く細いので身体を保つのが難しい。しかも、大きく仰け反っているので難易度はなおのことである。しかし吾輩には関係ない。首をすばめている美咲の首に沿うように反対側の肩に移動する。美咲もくすぐったそうに身をよじった。美咲の身体がぐらぐら揺れて体勢を保つのに一苦労する。しかしなんの。吾輩は振り落とされず、さらには美咲の首筋をちろりと舐めた。その瞬間、美咲の小さな悲鳴とともに今まで一番美咲の身体が大きく揺れる。危うく落ちそうになる吾輩。それを救ってくれたのはご主人だった。ご主人はやれやれといった感じで息をついた。

「ミーナ、お前、何がしたいんだ」

呆れているとため息をつきながらご主人は吾輩の目と鼻先でそんなことを言った。

むろん、吾輩は二人を仲直りさせたかったのである。

「もう、ミーちゃんたらいきなり首筋を舐めるんだもん。びっくりしちゃったじゃない」

少しむっとしたような声が後ろから聞こえてきた。かと思うと頭を撫でられる。この手の感触、きつと美咲に違いない。

「あっ……」

「うおっ」

けれど、吾輩は美咲の手を振り払うように、されにはご主人の手から脱出して地面へと降り立つ。ちりん、と首元の鈴が鳴った。ご主人と美咲の手の平の温もりから離れた瞬間、寒風がともかく寒かった。今更ながら離れたことを後悔する。後ろを振り返る。二人とも吾輩を見ていた。それにこたえる様に吾輩はなく。

ご主人と美咲は目を互いに合わせるとくすりと笑い、ついには噴き出して笑い始めた。

成功である。よしっ。

「相変わらず無茶をいたしますね」

そんな声が聞こえてきた。むろん、マロンである。マロンは相変わらずの真っ白なで綺麗な毛並みを持つ美しい顔をめいっぱい呆れた顔で染めていた。勿体ないとは常々思っている。

「ご主人と美咲のためならたとえ火の中水の中」

「くっ……拙者が付け入る隙がない……！」

相変わらずうなだれたように小次郎が後ろで呟いていた。

ご主人と美咲が、先ほどよりもかなり軽快な空気を醸し出しつつ歩き始めた。吾輩ら三匹もその後ろにくっついて行く。ご主人と美咲の間には温かな空気で満ちていた。吾輩も嬉しくて、尻尾を左右にいつも以上に揺らしながら二人の後ろを歩く。

——不意に、嫌な臭いがしてきた。

左右を見ると、小次郎もマロンも吾輩と似たような表情で顔しかめていた。

「なんですの、この臭い」

マロンが不愉快さを隠そうともせず呟いた。まったくの同感である。この臭いはなんだ？

「おい、あれなんだ」

その時上の方からご主人が声を上げた。上を見上げる。すると頭上には何やら黒い物が、ゆらゆらとたくさん寒風に弄ばれるかのよう空に舞っていた。

うち一つがご主人たちの近くへ振って来る。ご主人がそれを掴む。顔を思いつきりしかめた。

「美咲さん、これ何だと思う？」

「さあ？」

美咲もご主人と同じように首を捻ると、前方へ視線を戻した。

「あ！ あれ何!？」

美咲は声を荒げてかなり前方を指さした。

そこには邪悪な悪魔のような黒煙が上がっていた。それも徐々に黒煙の量が増加していくようにも見える。

吾輩ら三匹は首を傾げる。

「大変だーっ!!」

その時、前方からたいそう身体の大きな塊のような図体のドラネコが、まるで転がり落ちるような勢いで吾輩ら三匹に向かって走ってきた。大ちゃんがまた叫ぶ。

「千代ばあの家から火が!!」

7.. 吾輩と恐怖と紅蓮の悪魔

吾輩はすぐさま駆けだした。吾輩の後ろの小次郎、マロン、そして先ほど走ってきた大ちゃんも同じように全速力で駆けている。

吾輩らは大ちゃんから話を聞くなり駆けだしたのである。

『千代ばあの家から突然火が上がったんだ!』

大ちゃんは滝のように汗を全身から噴き出していたが、それらをまったく気にした様子もなく鬼気迫る表情でそう告げたのである。戦慄が吾輩を襲い、背筋が凍る。

「あの方角には千代子さんの家が!」

「なんだって!」

上でご主人らも気がついたようで叫び声を上げた。

そして二人とも駆けだした。

「いくぞ!」

吾輩をそれだけ言って駆けだした。他の三匹も同様に駆けだしたのを感じた。

吾輩は焦っていた。

一体全体突然何が起った? わからぬ。まったくわからぬ。とにかく吾輩は恐怖に背中を押されるかのように全速力で走っているのである。怖い。恐怖。悪寒。とにかく訳もわからずかけている。後ろから獰猛な獣が追いかけて来るような気配すら感じる。くそっ。まだ千代ばあ家の家に辿り着かぬのか。この足が憎い。もっと早く。もっともっと早く。もっともっともっと早く! 遅い遅い遅い遅い!

息も絶え絶えに吾輩は走った。吾輩の首元で吾輩の分身も焦ったように鳴いていた。あんなに清廉だったその音色は、もうすでにその記憶すら窺えぬほどに急いていた。そして目の前にやっと見慣れた曲がり角が現れる。あそこを左に曲がったすぐのところ千代ばあ家である。

この辺まで来ると鼻を突く様な嫌な臭いもいつそう強くなった。鼻が麻痺しそうである。本能が告げる。帰れ。寄るな。近づくな。早々に立ち去れと吾輩をせつつく。それがどうした。吾輩は駆ける。後ろの三匹とともに駆ける。もうずいぶんとご主人たちを後ろに置いてきた。それでも吾輩は駆ける。駆ける。駆ける。もつと早く。もつともつと早く。もつともつと早く。ああこの速度がもどかしい！

そして吾輩らは曲がり角を左へ曲がる。そこにはたくさんの人々がいた。うざったいくらいの人の群れ。邪魔だ邪魔だ。縫うように吾輩は人垣のすり抜けていく。そして目にする。

轟々と燃え盛る深紅の炎。

先ほどまであんなにものどかであった千代ばあの家が燃えていた。先ほどまであんなに居心地の良かった家が激しく燃え盛っていた。完全無欠に完膚なきまでに炎上していたのである。

吾輩はその光景を目にして立ちすくんでいた。

怖かったのである。

轟々と燃え盛る火炎が。

禍々とした黒煙が。

千代ばあが住んでいたこの家が。

怖かったのである。怖くて怖くて仕方がなかったのである。

吾輩よりも少し遅れてきたマロンが息を呑む声が聞こえた。小次郎が悔しそうに唸る声が聞こえた。大ちゃんの絶望に打ちひしがれた声が聞こえた。しかし、吾輩の耳には何も聞こえなかった。残らなかった。

とにかくこの目の前の光景が怖かったのである。

もう思考がまとまらない。何を考えているのかすらわからない。この中に千代ばあがいる？ そんな馬鹿な話があるものか。あつてなるものか。なあ、そうであろう大ちゃん？ 先ほどのあれは嘘な

のであろう？　これは現実ではないのであろう？　本当は燃えてなんかないのであろう？　千代ばあの家は今もおここにあつて、吾輩らが入るとあの優しい笑顔が迎えてくれるのであろう？　なあ、誰でも構わぬ。これが嘘だと言ってくれよなあ？

「ちよつと、そこを退いてください！」

不意にそんな声が近くて遠いところから聞こえてきた。

「何があつたんですかっ!？」

「放火だつてよ！」

「放火!？」

「あの、ここに住んでいるお婆ちゃんは!？」

「まだ出てきていないんだつてさ」

「じゃ、じゃあ千代子さんはまだあの中なんですかね!？」

「消防車は!？」

「それがこちら辺は古いから道が乱雑な上に、通りが細くてなかなか到着出来ないらしいつて、さっきそんなことが聞こえたぞ」

「そんな!？」

そんな焦つたような会話。吾輩のよく知る人間が声を荒げて話しているようにも聞こえたし、そうじゃないようにも聞こえた。ただ、何かに絶句したような空気だけは感じ取つた。

さらに炎はその勢いを増し、さらにさらにもっと激しく燃えだした。強烈な、この寒空を覆い尽くすかのような熱が吾輩の髭をちりちりと燃やす。

「おい！　このままだと隣の家にも飛び移るぞ！」

誰かが頭上で慌てたように叫んだ。うるさい。

「ど、どうしましょうミナさん！」

隣でも誰かが慌てたように叫んでいた。黙れ。

「くそ、このままでは家が完全に燃え落ちてしまふでござる！」

さらに隣で誰かが歯を噛みしめるように唸っていた。煩い。

「千代ばあは!？」　千代ばあはまだ出てきてねえのか!？」

そのさらに隣で誰かが悲痛な声で叫んでいた。だからその口を閉

じてろ！

吾輩は何やらわけのわからぬ怒りの炎に、この身を焦がしそうになっていた。冷たい戦慄と燃えるような憎悪が駆け巡る。吾輩は唸る。唸り声を上げる。がたがた震え、今にもこの場から逃げ出したいと後ろに逃走を囑ろうとするこの身体を叱りつけ、吾輩は唸った。誰の仕業だ？ 一体誰がこんなこと？ 許さぬ。許さぬぞ。

しかし、それよりも――

――吾輩には何もできない。

それがたまらなく悔しくて許せなかった。この黒く小さな身体では、何もできない。それどころか今にも逃げ出したくてたまらないのである。それが悔しい。この場から逃げ出すことを切望している吾輩が許せない。

千代ばあの柔らかく暖かな笑顔が脳裏を過ぎる。

吾輩はこのまま何にも出来ないのか――

「ちょっと失礼します！」

その時ひととき大きな叫び声が上がった。続けざまに、ざばざばびしゃりという音が続けざまに聞こえ、そして周りの人々の怒声に似た声と悲鳴とどよめきが伝わってきた。

吾輩はそちらの方へ振り返った。そこには、厚着を脱ぎ捨て全身びしょ濡れのご主人の姿が。

「ま、真人さん？」

「ちょっと美咲さん。ここで待っていてください」

「ちょ、ちょっと真人さんどこへ！？」

そしてご主人は不意に――否、勇猛果敢に目の前の業火の中へ全速力で駆けだしたのである。美咲の悲鳴じみた声が寒空に響く。ご主人は燃え盛る千代ばあの家へ飛び込んで行った。その瞬間、まる

で無謀な挑戦者をあざ笑うかのように紅蓮の悪魔が、さらにその熱量を上昇させた。

「真人さん！」

美咲の悲痛すぎる切羽詰まった悲鳴が寒空を貫いた。

吾輩は今しがた目の前で起こった光景に白黒させていた。一体、何が吾輩の目の前で起こったのか、全然理解が追いつかない。

何が起こった？ ご主人が飛び込んだのである。どこに？ この燃え盛る千代ばあの家には？ 何故？ 何をしに？ 千代ばあを救うために？

「ミーナさん！ あなたの主人が！」

「うるさい！ そんなことはわかってる！」

ミーナの声に思わず怒鳴り返す。わかっているのに理解が追いつかぬ。否、理解することが出来ないのである。この双眸に映るすべての光景が理解できないのである。

燃え盛る千代ばあの家。そこから出てきていないという千代ばあ。飛び込んで行ったご主人。

「一体これはどういうことなのだっ！？」

もうたくさんだ。さっきまであんなに穏やかだったというのに、一体何がどうなってしまったというのだ？ 吾輩は一体どこで何を間違えたと言うのだ？ もうわからぬ。もうたくさんだ。

「しっかりなされよミーナ殿！」

その時ひと際凜とした怒号が、吾輩の芯を貫いた。吾輩の中心が打ちひしがれたように激しく振動する。振り返り怒号の主を探すと、そこには悠々とした表情の小次郎がいた。

「ミーナ殿が取り乱してどうする！ 気をしっかり持たれよ！」

再びの怒号に吾輩ははっとする。そうだ。吾輩は一体何を考えているのだ。しっかりしろ。

「……すまぬ、小次郎」

顔を俯かせて嘸みしめる様に言う。

「吾輩はどうかしていたようだ」

そう言うと、少し小次郎はほっとしたような表情を浮かべたが、すぐさまその顔を引き締める。

「今は落ち込む時ではないでござる。ミーナ殿が今すべきことは、千代ばあとミーナ殿の主人殿が無事に帰還することを全身全霊で祈ることだ」

「……うむ」

吾輩は頷く。

「うむ、そうだな」

噛みしめるように再度頷く。

吾輩は目の前の燃え盛る千代ばあの家から一度視線を外し、吾輩は強く両目を瞑る。

未だご主人と千代ばあ姿は見えない。どうか、無事であって欲しい。吾輩はご主人と初めて会った雪の夜に願った神様に再度願う。どうか、ご主人と千代ばあを無事に還してください。

その時、人々の悲鳴が上がった。

慌てて目を見開くと、さらに先ほども炎が轟々と音を立てて千代ばあの家を食らっていた。黒煙が禍々しく寒空を染め上げて行く。大変耳障りな音とともに千代ばあの家が壊れ始める。倒壊が始まったようである。

「ああ、真人さん……千代子さん……」

美咲は悲痛な表情と声のまま、目を思いつき強く瞑り、両手で互いの手を今にも握り潰さんばかりに握りしめていた。

隣では、吾輩の仲間たちも同じような表情で千代ばあとご主人の身を案じて祈っていた。

吾輩も再び目を閉じ、先ほどよりも強く神様にご主人と千代ばあの身を祈った。強く、強く、何よりも誰よりも強く祈った。願った。どうか、どうか。千代ばあを無事に還してください。どうか、どうか。ご主人を無事に還してください。お願いします。どうか。吾輩らの平穏な日常を奪わないでください。

めきめきめきといういつそう嫌な音が辺りに大きく鳴り響いた。

人々がどよめき、美咲が悲鳴を上げた。

突如二階の窓が割れて、そこから黒い影が飛び出してきた。

黒い影は、もうひとつの抱きかかえるように内に抱いている黒い影を庇うように、鈍い落下音とともに地面へと降り立った。

吾輩が見間違はずがない。真っ黒で煤に塗れたご主人と千代ばあであった。二人は立ち上がるなり、燃え盛る炎から逃げるようにこちらへ駆けだしてきた。

「真人さん！ 千代子さん！」

涙声の美咲が二人に向かって叫んだ。それにご主人が笑顔で手を振り、千代ばあがまたあの柔らかく暖かい笑顔で答えた。

次の瞬間、千代ばあの家が燃え盛る悪魔に食らい尽くされ荒らされ尽くされ、そしてついに轟音とともに倒壊したのである。

8.. 吾輩と満月と再びの危機

「もう真人さんたらいったい何をしているんですか！ 心配したんですよ！」

「ご、ごめんない。申しません。反省しています。すみません」

「本当に私がどれだけ心配したことか！ 本当にわかっていているんですかっ!？」

「す、すみませんでした。ほんとのほんとに反省しています。この通りです。本当にすみませんでした。もう絶対二度としません。今の場でそれを誓います。ごめんなさい」

今まで吾輩が見たこともないような剣幕で、周りを一切顧みず美咲がご主人に怒号を飛ばしていた。吾輩ら四匹の全身の毛が逆立つほどの鬼気迫るそれを受け、ご主人は地面に手を付き、なんども美咲に謝っていた。しかし、そんなご主人の姿が目に入らないのか、美咲も怒りの矛を抑える気配を一向に見せない。これが真の鬼か。

「まあまあ、美咲さん。その辺で許してやってください」

「……千代子さん」

柔らかな笑顔をいつ何時も崩すことない千代はあは、すでに鬼へと姿を変貌してしまった美咲にまったくこれっぽっちも臆することなく、それでも穏やかにそう言った。

「こうして私も真人さんに助けられたことですし、そのことでここはどうか。ね？」

「……………はい。わかりました」

不承不承といった感じで、しかし美咲は頷く。その時のご主人の顔がまた印象的であり、地獄の底で一本の蜘蛛の糸をでも見つけたような顔をしていたのである。そんなに怖かったのか。いや、あれは吾輩らも毛が逆立つほどに恐ろしかった。尻尾もぴんと尖がったままである。先っちょ真っ白な黒色針金尻尾。

そんな美咲たちの後ろでは、恐ろしいほどの水量と水圧を放出している真っ赤な火達磨のごとき車が数台鎮座しており、大勢の男たちの声が響き渡っていた。あの倒壊してなお激しく燃え上がっていた千代ばあの家の炎を鎮火させるべくやって来た消防車というものらしい。あの真っ赤な装甲がこちらに向かって走って来たのを確認した時、吾輩の背筋に薄ら寒い物が走ったのは言うまでもない。

ようやくといった感じか。今まで悪魔のごとき炎よりも轟々言っていた水の魔物の咆哮が止む。見やると、数刻までいた千代ばあの家は、それはもう無残といったありさまに変わりきっていた。幸い横の家に飛び火しなかったが、おそらく千代ばあの家が広がったのも飛び火しなかったひとつの要因であろう。しかし、真っ黒焦げの煤塗れとなってしまった千代ばあの家を見ていると、胸の内側から哀愁が漂ってきた。結果的に誰も失わなかったが、こんな幸運、いつまで続くのだろうと思わずにはいられない。空を見上げると、真っ黒な灰が空から雪のごとく辺りに舞い降りていた。ご主人たちとともに見上げたのは、あれであった。現在も絶え間なく降り落ちている。

ふとご主人を見ると、ご主人は炎の中に飛び込む際に脱ぎ捨てた厚着の衣類を地面から取ろうとしていたところであった。

「あっ」

思わず吾輩はそんな声を出す。横で不審そうなマロンの顔がちらりと窺えたが、しかしそんな些細なことにすら気にならない。否、気にするだけの余裕はない。しかし、ご主人は美咲の方を見ながら拾ったためにそれに気付いていない様子であった。

それだけならすぐに気がついたかもしれない。しかし、現実には消防隊員の人々がご主人の方へ駆け寄ってきて、また美咲と同じように説教を始めたのである。それで、ご主人は美咲に怒られている時と同じように頭を何度も下げ、そしてその結果それに気付くことはないように思われた。

ご主人の厚着の衣類から、今朝方見せてもらった輪郭のみの満月の入った箱が地面に零れ落ちていたのである。

ご主人が気が付いてない、そして気がつく気配がないことに気がつく、吾輩は焦った。そして駆けだそうとした。早くあれをご主人に気がつかせねばと、駆けだそうとした。しかし、その前に吾輩は息を呑み絶句したのである。吾輩が駆けだそうとした瞬間、何者かがそれに気付かず蹴り飛ばしてしまったのである。

吾輩はその光景に言葉を失った。蹴られた箱は、人々の間を運悪くいつそ気持ちよいほど続けざまに蹴られていた。そして箱が開き中から勢いよく輪郭だけの満月が飛び出してしまった。「あっ」再び吾輩が声を上げるか否かのその瞬間、その満月もまた何者かに蹴り飛ばされ、大きく人々から離れてころろと道脇の溝に落ちていつてしまったのである。

「ん？ どうしたんだ、ミーナ？」

大ちゃんが不審そうに吾輩に尋ねてきた。

「満月が」

ご主人があんなに大切そうにしていた満月が。

「満月が落ちてしまった」

「は？ ——ちょ、おい！」

不審そうな声を出す大ちゃんを他所に、吾輩は満月の落ちて行ってしまった溝へ向かって駆けだした。慌てたように他の三匹も付いてくる。溝を覗き込んだ吾輩に、三匹はいぶかしんでいるようである。

「どうなされた？」

小次郎が訪ねてきた。

「ご主人の大切な物が今この中に落ちて言ってしまったのである」

落ちた底は薄暗く、昼間にも関わらず微妙に中が把握しづらい。

一体、あれはどこへ言ってしまったのであろうか？ 不安がよぎる。

「なんと！ それは真か！」

後ろで吾輩の返事を聞いた小次郎が声を上げた。

「拙者にどうかお任せを。かような場所に淑女が入るべきではないのでござる」

言うなり小次郎が溝の中に飛び込む。吾輩が口を挟む隙もなかった。

吾輩に残る三匹が溝の中を覗き込む。と言っても、すぐ目の前に小次郎がいるため、覗き込むと言うのも少々変な言い方ではあるのかも知れないが。

「けっ、かつこつけやがって」

「どうだ？ 見つかりそうか？」

何故か憎々しげに大ちゃんが呟いていたが、今はそれどころではなく、さっそく吾輩は小次郎に尋ねてみる。上から見たしなやかな三色の肢体は、その筋肉の付き具合を如実に示しており、いつ見ても惚れ惚れするような身体であることが窺える。

「いや、それが――む？ なにやつ！」

不意に毛を逆立て、吾輩らからは丁度溝の蓋により見えない位置を睨みながら小次郎が押し殺した声で威嚇した。

「チュウッ！」

「ちゅう？」

その時である。吾輩ら猫の食欲をそそる声が聞こえてきたのは。

「ねずみか！ ねずみがそこにいるのか！？」

「拙者の獲物だ！」

声を吾輩と同じく聞きつけたらしい、食いしん坊の権化たる大ちゃん息を荒げた。それに反論するかのように小次郎も息を荒げた。しかし一向にこちらからは中の様子が窺えず、吾輩はやきもちした気持ちに駆られる。

「くっ……狭くて上手く身動きがとれぬ――あっ、待て！」

無理やり俊敏に動こうとしたらしい。鈍い音とともに小さな苦痛の音が、溝の中から聞こえてきた。どうやらねずみは奥へと逃げて行ってしまったらしい。ごくりと名残惜しく唾を呑みこむ。残念で

ならない。

「だ、大丈夫ですよ小次郎さま！」

誰よりも慌てた感じでマロンが声を荒げた。ひよっとしたら三匹の中でこれが一番声が大きかったかも知れぬ。

「なに、まったく問題ないでござるよマロン殿。心配して頂きかたじけない」

あははは、と苦笑じみた笑みを浮かべた小次郎が、溝の中から吾輩らを見上げてきた。

「ところでミーナ殿」

「ん？」

「探し物をもうちょっと具体的に教えてくはくれまいだろうか？」

「……うむ」

「……………忝い」

しばし吾輩らの間に無言が流れる。ごほん。気を取り直し吾輩は言う。

「指輪というものらしく、金色の輪つかという形状をしている。丁度輪郭だけの満月に」 「なに！」

びっくりして吾輩は言葉を切る。吾輩が話している途中にもの凄い勢いで小次郎が仰け反り、思いつきり絶句したからである。小次郎は比較的冷静な奴であるため、ここまでの反応は大変珍しい。そんなことを冷静な頭が思った。

「どうした？」

「先ほどの鼠がそれらしきものを啜えて逃亡したのでござるよ！」

「なにい！！！」

そして今度は吾輩が大きく仰け反り、思いつきり絶句する番であった。

9…吾輩と追跡と黒い影の飛来

吾輩ら四匹は連なり、狭い溝の中を先ほどねずみが逃げて行った方角へ向けて歩みを進めていた。

現在その並び順は吾輩、マロン、小次郎、そして大ちゃんである。しかし、中はやはりというか当然というか、大変汚い。そんな中を吾輩ら四匹は仲良く這いずり奥へと進んでいく。中は時折差す外の光以外は真っ暗であったが、吾輩らの行動になんら支障はなかった。

『絶対に、ぜえったいにわたくしはこのような場所には入りませんわっ!!』

と駄々をこねたマロンの気持がよくわかる。後ろから浴びせられる不機嫌極まりない視線に、何度目かもわからぬ謝罪を心中で繰り返す吾輩。ごめんない、マロン。

そして、小次郎は現在絶賛罪悪感に苛まれ中である。

『拙者があそこでちゃんと捕まえておれば……』

そう言っただけでも吾輩に頭を下げてきたのである。しかし、そんなことを言っただけでなってしまうものはいたしかたない。なに、見つければいいだけのこと。ひょっとしたら途中で落としているかも知れぬしな。

ずんどこずんどこ進んでいく。もうここがどこなのか皆目見当がつかぬ。帰り際にはどうしよう? という思いが脳裏をかすめたが、絶対に満月を取り返すまでは帰らないと心に固く誓う。

それからどれほどの時間が経ったのだろう。目の間に二又の別れ道が現れ、吾輩は途方に暮れてしまった。

「どちらに行けば良いと思う?」

「さあ? どちらでもよろしくなくて?」

不機嫌丸出しといった感じにマロンが答えてくれた。他二匹も口

ぐちに「拙者が選んだら絶対に間違えるに決まっておる故」とか「あー、うーん。すまねえ。全然見当もつかねえ」といった感じでどうしようもなくなる。どうすればいい。吾輩もどちらに行けばいいのかさっぱりだぞ。あのねずみが目印になるような物を残してないかと、目を皿のようにして辺りを確認するが吾輩をあざ笑うかのようにそんなものは見つかりはしない。

吾輩らは本気で途方に暮れてしまった。焦る気持ちが積もる。どちらの道を行けばいい？

その時、吾輩はとあることを思い出した。そう言えば、以前似たようなことがあった時、マロンが言った方向に探し物があったのではないか？

「マロン」

「なんですの？」

マロンの返答は相変わらず棘々しい。負けるものか。

「どちらへ進めば良いのか、選んでくれ」

「……はあ？ 貴女馬鹿じゃないのですの？ そんな大切なことをわたくしに決めさせるなどなんて」

案の定、驚きと呆れを足したような返事を返される。

「いや、真面目な話だ。吾輩はマロンに決めてもらいたいのだ」

「そんなこと、言われまして……。それに間違えてたらどうするおつもりですの？」

「ない。マロンは間違えないさ。この間も、その前もその前の前も小次郎を町中から探し当てたではないか？」

「そ、それはっ……！」

もごもご後ろでマロンは言う。畳みかけるように吾輩は続ける。

「マロン、自分の力を信じるのだ。吾輩には今はお前しかない。どうか力を貸してはくれないか？」

「……………ああ、もうですわっ！」

ついにマロンが折れた。

「左ですわ左！ もうどうなっても知りませんことよ！」

やけくそ気味にマロンが叫んだ。

「了解した。ではみんな行こう」

そして吾輩ら四匹は左の道を再び這い進み始めた。

それから数分後。

吾輩らはかのご主人の満月を奪い去ったねずみと遭遇した。ぱったりとである。

「……」

「……」

あまりに突然であったので、しばし吾輩らの間に沈黙が流れる。お互いの時が止まったかのようにしばし見つめ合う。

「……そんな、まさか、本当にこっちにいただなんて……」

そんな感じの絶句したようなマロンの呟きが背後から聞こえてきた。信じていたとはいえ、流石にここまででは想定していなかったのだ、吾輩も現在驚愕しきっており思考が働かない。

「チュ、チュウツ！」

そんな中、真っ先に意識を取り戻したのは前方のねずみの方であった。ご主人の輪郭のみの満月を咥えたまま、吾輩らに背を向け一目散に逃げて行った。

「まっ、待て！」

そこでもうやくはつとなり、吾輩らも慌てて後を追いかける。ここに狩る者狩られる者の制止を駆けた追いかけっこが始まったのである。

すばしっこく逃げるねずみ。追う吾輩たち。すいすい逃げて行くねずみに、吾輩は四苦八苦しながら追いかける。この場において体格差が仇となっていた。

「くっ……!!」

それでも吾輩らは追いつかんと走る。駆ける。追いかける。ねずみも追いつかれまいと走る。駆ける。逃げ回る。しかし、ようやく走りやすい体勢を吾輩は発見する。ぐい、と一気に速度が加速する。たたたたたつ。もう少し。もう少し。あとちょっと！ あとちょっと

とでこの手が届く！ よしっ、今だ！ 吾輩はねずみに向かって飛びかかった。がしかしねずみの方も必死であった。寸でのところで身をひるがえし、吾輩を避ける。しまった！ しかしそう思った時は時すでに遅し。すたこらさっさとねずみは溝から地上へと飛び出してしまったのである。「追うぞ！」言うが早く吾輩も続けざまに飛び出す。そこはもう吾輩が知る景色とはかけ離れた景色が広がっていた。広い道路。田んぼ。小川。木。森。大きな山々。いつもりも高く感じる空。澄んだ空気。どこだここは？ しかし今は構ってられぬ。吾輩は急いで地上に視線を戻す。ねずみは前方を走っていた。くそ、まだ追いつける。吾輩はまた駆けだした。距離は溝から飛び出した時間の差異により、先ほどよりも少々遠い。だが、外へ出た今、吾輩の方が有利である。このまま行けば追いつけるぞ！ しかし、それはどうやらねずみも同様のことを考えたらしい。不意に道をそれ、雑木林の中へ飛び込んでしまった。

「しまった！」

「任されよ」

その時、一陣の風が吾輩の横をすり抜けて行った。疾風と化した小次郎が、矢のように鋭く空気を切り裂き駆けて行く。

「待つでござる！」

ねずみを前から回り込む形で小次郎は進路を阻む。でかしたぞ小次郎！ ねずみが怯えたように足を止める。しかし奴も必死である。すぐさま進路を右へと変更し駆けだそうとする。そうはさせるか。

小次郎のおかげで追いついた吾輩が今度はその進路を塞ぐ。

「チュウ！」

悲鳴を上げ、ねずみがまたもや急停車をする。そしてすぐに吾輩から背を向け、今度は反対側へと駆けだそうとした。

「させませんわっ！」

今度はマロンがその進路を阻む。またもや急停止。しかし奴は諦めない。最後の逃げ道となった、元来た方向へ身体を向ける。

「のわああああ！！！」

怒号とともに一番足の遅い大ちゃんが転がるようにその進路へつっこんできた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……へっ、逃がさねえぜこの野郎」

汗が鉄砲水のように噴き出しながら、息も絶え絶えにそれでも不敵ににんまりと笑いながら大ちゃんはそう言い切った。これで完全に進路も退路もない。吾輩らの絆の連携が成せる業である。四方を囲まれ。絶望さえ感じられる悲鳴を上げるねずみ。それでも満月はまだ離さない。強情な奴である。

「さあ、それを返せ。返せば命までは取らぬ」

じりっ、と吾輩らは輪を縮める。逃げ場のないねずみは身を竦ませた。それでも満月は咥えたまま。いい加減にせよ。

「さあ、早くご主人のそれを返せ！」

「カァ！」

追いつめたと思ったその時。吾輩らの頭上からそんな甲高く耳障りな声が聞こえてきた。慌てて見上げる。しかしそれよりも早く漆黒の羽が迫って来たのである。それは、鋭く鋭利な角度でねずみが咥えていた満月を奪い、また空へと舞い上がった。

「何奴！」

小次郎が叫んだ。吾輩の目の前で再び満月を奪った漆黒のそいつは、また甲高く「カァ」と鳴いた。

「チュウ！」

これ幸いとばかりに、ねずみが吾輩の横をすり抜けて一目散に逃げて行った。しかし、そんなものに構ってはおれぬ。吾輩は空の漆黒を唾然としたまま見上げた。漆黒の羽を持つそいつは、賢くずる賢い、そして狡猾な鳥類、からすであった。

「てめえ、それを返しやがれ！」

ひどく威圧感のある声で大ちゃんが叫んだ。しかし、頭上からすはどこ吹く風といった感じで鼻で笑うように鳴いた。

「あっ、待てやコラァ！！」

そんな大ちゃんの怒号もむなしく。

無情なまでに軽やかにからすは、また吾輩らを見下しながらあざ
笑い。

遠くの山へと飛んで行ってしまったのである。

吾輩はそれを、ただただ啞然としたまま見送ったのである。

10：吾輩と仲間と取り返した宝

「あの木の上ですわ」

「まさか本当に見つけるとはな……」

「マロン殿にまさかこれほどの才覚があるとは……」

「やべえ、一瞬惚れそうになっちゃまったぜ……」

山の中をマロンが「わたくしにお任せなさい」と言うので、その先導従う形で後ろを歩くことしばらく。鼻歌交じりに前を歩くマロンに、吾輩ら残りの三匹は不安を隠しきれない表情で、互いの顔を確認しながら歩いていたのは今となっては良い記憶である。そしてマロンが足を止めたのは一本の木の下。マロンの視線を辿るとそこには、あの忌々しいからすの姿が。そこにはあのからすの巣があったのである。

「どうですの」

「いやまったく、恐れ入ったとしか言いようがないな」

「えっへん」

誇らしげに胸を反るマロン。その姿は優雅でありながら可愛らしかった。そんなマロンに吾輩は素直に感謝の気持ちをします。マロンもまんざらではなさそうであった。

「しかし、」と顔を引き締めた小次郎が口を開く。

「ミーナ殿のご主人の指輪は何処にあるのでござろう？」

「あっ、あれじゃないかしら？ ほら、あの巣の隙間から見える」

「おお、確かに！」

丁度吾輩らから見て真正面——正しくは下から見上げた位置に、からすの横に保管されるように置かれているご主人の満月があったのである。よし、位置はしっかり把握したぞ。しかし——

「だが、」

再び小次郎が吾輩と同じく言葉を濁した。

「あやつを一体どうやってこちらへおびき寄せるのでござるか？」
確かにその通りである。うーん。どうしたものか。木に登ることはできるが、しかしあの大きさと骨が折れそうなのはまず間違いない。しかし、途中で気付かれて攻撃を受ける可能性もある。

「あくまで吾輩たちの目的はご主人の指輪の奪取であるしな」

本来なら、真っ先にあの忌々しいからすをいたぶってから指輪を回収したいのだが、しかし目的を見間違っではならない。しかも、もう夕暮れ時。あまり時間をかけるわけにはいかない。

出来れば、可能な限りあのからすとは関わりたくない。

「へっ、それはオレ様に任せろやい」

振り返ると、今まで対して出番のなかった大ちゃんが、ここが見せ場だとばかりに一步踏み出していた。

「どうするのだ？」

「こうするのだよ」

言うや否な大ちゃんはからすの巣がある木に向かって駆けだした。どん！ 頭から思いっきり木へ体当たりを決行する。木が揺れ、かえすが奇声を上げる。そして巣から慌てた様子で飛びあがった。なんと！

「気付かれてしまったではないか！」

「へっ、こっちの方がてっとり早くていいじゃねえか」

こちらの思惑を完全に裏切る形で詫びれもなく大ちゃんはそう言い切った。

「え？ ひょっとしてまずった？」

「当たり前だあ！」

「なにいいいいい！」

「カァ！」

そんなやり取りをぶった切るかな甲高い耳障りな鳴き声が辺りに響いた。恐る恐る見上げるとそこには怒り狂ったからすの姿が。ぎらりと、気持ち悪くその目が動く。いかん、完全に敵と認識されてしまったようである。

「カァ！」

からすが吾輩ら三匹目掛けて急降下してきた。慌てて、吾輩は横へ飛び退く。

「キヤーツー！！」

しかしマロンはそうは上手く行かなかったらしい。こんなところで普段の運動不足が露天しているかのようだ。悲鳴を上げているマロンに向かって、情け容赦なくからすがその鋭く鋭利な嘴を向けてつつこんできた。危ない！　そう吾輩は叫ぼうとした。

「避けるでござる！」

そんなマロンを突き飛ばし、さらにその上から守るように小次郎はマロンの上に覆いかぶさる。

からすの口ばしが寸でのところで空を切る。再び上昇してこちらを見下ろしたからすが、悔しそうにまた鳴いた。

「だ、大丈夫でござるかマロン殿！」

「……は、はい……小次郎さま」

「そうか、それは良かった」

「……………はい」

「次が来るぞ！」

こちらの現状にお構いなのか、再びからすが突撃の構えを見せる。しかし、どうすればいい。このまま防戦一方にだけはしたくない。考える。考えるのだ。

「カァ！」

一本の矢へと姿を変貌させたからすが、吾輩らを穿とうと急降下してくる。くそっ、打つ手はないのか。

吾輩がその攻撃を避けようとしたその時、背後から怒号が聞こえてきた。

「うらあああああ！！」

黒い塊が急降下してきたからすに体当たりを食らわした。両者ともに弾け飛ぶ。しかし、飛び出した大きな塊は無様に地面に落ちたのに対し、からすは体勢を立て直し再び空へと舞い上がった。そし

て、ひと際うるさく鳴き喚いた。からすに果敢に体当たりを食らわせたのは大ちゃんだった。

「けっ、ざまあみろってんだ。イテテ」

むくりと起き上がり、さっそく悪態をつく大ちゃん。その顔は悪代官のそれでいよいよ猫大将しての本領を発揮しだしたようである。

「ふんっ、やるではないかドラム缶」

「あたぼうよ、このモヤシ野郎」

「戯け」

小次郎と大ちゃんが互いの顔を見合わせてにやりと笑い合った。これが男の友情といったものなのか。美しいのかそうでないのか判断がまるで付かぬ。

「これはオレ様のせいだからここは任せろ」

「ミーナ殿とマロン殿はお早く、あれを。ここは拙者たちが引き受けます故」

そして二匹はからすを引きつけるように駆けだし、彼らに背を向ける形でマロンがこちらへ駆け寄って来る。

「さあ、お早く！」

「うむ！」

互いに力強く頷き合い、吾輩らは巣のある木の根元へ向かって駆けだした。後ろからからすの鳴き声が聞こえてきたが、大ちゃんと小次郎を信じて後ろは振り向かなかった。

木の根元に二匹揃って到着。揃うなりマロンが吾輩の方へ顔を向ける。

「わたくしの上に乗ってください！」

「は！？」

「少しでも早く取りに行かなくてはなりませんのよ！ だからわたくしを踏み台にいたしなさい！」

「了解した。失礼する」

すぐさま吾輩はマロンの美しく、しかし今は多少汚れてしまった白い背中に飛び乗る。そして、木に向かって勢いよく飛び移る。前

足と後ろ足から一斉に木に爪を立てる。ぐっ。滑り落ちそうになる。しかし、ここで落ちるわけにはいけないのである。吾輩は齒を食いしぼり、確実に一步一步登っていく。はやる気持ちを必死に抑え、確実に前へ。上る。登る。昇る。あと少し、あとちょっと。首元でご主人が頑張れと転がった。待っていてくれご主人。もう少しで届く。あと、あと、あと――よし、届いた！

「取り返したぞ！」

嬉しさのあまり吾輩は叫んでいた。その時申し合わせたように向こうからも怒号が聞こえたきた。

『秘爪・鴉返し』

そちらを見やると、今まさに小次郎がからすをひっくり返して地面へと墜落させているところであった。しかも、小次郎は宙を浮いていたのである。その下には大きな腹をめいっぱい膨らませている大ちゃんの姿が。最後までそんな役回りなのか大ちゃん。

「やりまわしたわね！」

少々怖かったが、地面へと降り立つと、嬉しそうに尻尾を立てながらとびっきりの笑顔のマロンが吾輩を出迎えてくれた。

「ああ！」

吾輩もそれにとびっきりの笑顔で答える。

ようやく満月を取り戻した。もう陽は沈もうとしている。

「よし、早く戻ろう」

そして、吾輩らは勝利の余韻をいつまでも味わうことなく駆けだしたのである。

11…吾輩と幸福と空が白い今宵の月

走る。奔る。走って奔って駆けた。絶えず首元の鈴が吾輩の周りで鳴り、全速力で息も絶え絶えで走る吾輩らを鼓舞してくれているかのようである。辺りの陽はもうすでにほとんど落ちた。既に暗闇が世界を侵食していた。街灯が照らす光の中、吾輩ら四匹は走る。走る。走る。走る。全速力で走る。ようやく見慣れた街並みが見えてきた。あと少し。あと少しである。

「ど、どちらに……向かっているの、です……！」

後ろから息を切らせながらマロンが、それでも叫んだ。疲労困憊といった感じである。

「み、みぎわ公園……というところの……噴水前だっ……！」

前を走りながら、後ろを振り返らず前だけを見据えて吾輩はそう答えた。もう限界も近い。自分の身体に鞭打ち走る。

「左様か！ では次の拙者の合図で、左へ曲がるで、ござるよ！」

横から小次郎が告げる。流石の小次郎も息が上がっており、疲労を隠し切れていない様子であった。

「了解した！ ——大ちゃんは、無事か！？」

「ぜえぜえぜえぜえ問題っねえ！ ぜえぜえ」

吾輩の声に一番後方から、問題しか感じられぬ声で大ちゃんが返事を返して来た。心配だが、しかし今はあまり構って上げられる余裕はない。

「そこを左でござる！」

小次郎の合図に吾輩らは一斉に左に曲がり、とある民家の庭の中へ飛びこんだ。千代ばあよりも随分とこじんまりとしている庭を抜け、塀へ飛びのぬ。先導するかのように前へ飛び出した小次郎の後ろを追って、次の民家の中へ飛び降りる。大ちゃんは大丈夫であろうか？

曲がりくねり捻くれきった猫だけの道をひた走る。他のことを考

えている暇はない。口にくわえた満月をご主人に届けることだけを今は考える。もう辺りは真っ暗だ。目の前に草むらと木々が現れた。みぎわ公園である。ようやくここまで来たか。あと少しだ。待っているご主人！ 待っている美咲！

大きな噴水の美麗極まりない装飾の施された、色とりどりに輝く大きな木の近くにご主人と美咲はいた。ご主人は何やら打ちひしがれたような表情で、まさに絶望しきった顔をしていた。その横では美咲が心配そうな顔をしていた。

吾輩は最後の力を振り絞り、よろよろとなってしまうた足に鞭打つ。

「ミーちゃん！」

先に吾輩に気がついたらしい、美咲が驚愕したように叫んだ。それに釣られるようにしてご主人も吾輩の方へ向く。そんな二人を眼前に収めながら、しかし朦朧とした足取りで吾輩は二人の元へ歩いて行った。

「お前、一体どうしたんだよ！ そんなにボロボロになって！」

そんな荒げた声とともにご主人が駆けよってくる。そして、あの温かな両手にそっと掬いあげられる。

「お前、それをどうして……」

震えた声でご主人が吾輩の咥えている満月を指さした。吾輩は最後の力を振り絞り、ご主人にそれを差し出す。

「真人さん……それは……？」

「……うん。そうだよ、美咲さん……」

ご主人はひどく優しい面持ちでそれを受け取った。そして一度吾輩を地面へと下して、いつもの優しく大きく暖かな手で、いつもよりも優しく吾輩の頭を撫でてくれた。

そして立ち上がり、ご主人は美咲に向き直る。その目は決意の光を放っていた。

「無くしちゃったと思ってたんだけど、どうやらミーナたちが探し

て見つけてくれたみたいだ」

そう一度はにかみ、ご主人は顔を引き締める。そして、あんなにも綺麗だった今は切り傷や泥に塗れて汚れてしまった満月を手の平に乗せて、美咲の方へ差し出す。

「俺と結婚してくれませんか、美咲さん」

寒空の暗闇の中。それはひと際強く光ったような気がした。

無音の時間が流れる。

吾輩はそんな二人を固唾を吞んで見守っていた。

美咲は両目を閉じた。

そんな美咲をご主人はいつもよりも数倍穏やかな表情で見守っていた。

そして、たつぷりと時間を開けてから、美咲はゆっくりと瞳を見開いた。

「はい、よろこんで」

それは何とも形容しがたい至高の光景であった。暗闇の中、光の温かな粒子が弾けている。こんなに温かな光景は、未だかつて知らぬ。

「やりましたわ！」

後ろを振り返ると、そこには三匹の吾輩の掛け替えのない仲間の姿があった。彼らはみな、満面の笑みを浮かべていた。

「うむ」

だから、吾輩もそんな彼らにとびっきりの笑顔を返す。

「ミーナー！！」

そんな大声が頭上から聞こえたかと思うと、いきなり前足の裏に手を入れられて吾輩はご主人に高く持ち上げられる。

「ありがとう！ 何もかもお前のおかげだよ！」

そして、ご主人の胸元にきつく抱きしめられ顔をすりすり。くすぐったくて吾輩は鳴いた・

「ねえ、真人さん。雪が降って来ましたよ」

美咲の穏やかな声にご主人のすりすり攻撃は止み、そして二人して空を見上げた。

空からはご主人と吾輩が初めてあった時のように、真っ白な雪が舞い降りていた。

やはりこうでなくては。吾輩は、嬉々として思いっきり空の白に向かって鳴いたのである。

11…吾輩と幸福と空が白い今宵の月（後書き）

最後まで目を通してくださり、誠にありがとうございました。

いかがだったでしょうか？

少しでも面白かったのなら幸いです。

今回僕は、

- 1…表現および比喻
- 2…展開の盛り上がり
- 3…三人以上の登場人物の使い方

を特に念頭に置いて頑張りました。

テーマも一応盛り込んでいるのですが、どうでしょう。ちゃんと書ききれているのか心配ではありません。

途中、字数制限により止む終えず一話分削除してしまい、それが大変悔やまれますが（結構頑張って書いたのにorz）、しかし今は書き終えた充実感に包まれております。

何かあれば感想および評価のほどをよろしくお願いいたしたいします。

どんなものでもどんとコイ！

メッセージなどでも構いませんので、どうかよろしくお願いいたします。

サンタさんの代わりに、感想をどうか僕にプレゼントしてください（笑）
そして僕は皆さまにサンタさんの代わりになって、ちゃんとしたほ

んのり温かなプレゼントを渡すことができましたでしょうか。

それが今は気がかりではありません（笑

少しでも楽しめていただけたら、僕はそれだけで嬉しいです。

それでは最後に改めて。

拙作を最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1385j/>

吾輩はミーナである。

2010年10月8日15時51分発行